
砂の上の楽園

高遠響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂の上の楽園

【Nコード】

N1988T

【作者名】

高遠響

【あらすじ】

アラフォー・お一人様・恋人は会社の上司……もちろん、不倫。大人の恋と割り切っているつもりなのに、宏美の心はぬぐいきれない乾きが溢れている。

そしてある日、恋人である田牧の妻が交通事故にあう……。

大人の女

1 .

何処までも続く薄い茶色の砂の世界。遙か地平線の彼方まで広がる砂漠は定規で引いたような直線で青い空と分けられている。

その狭間でゆらゆらと揺らめきながら幻のオアシスが浮かんでいる。もう少し歩けば、そこに辿り着く。そんな期待を旅人に抱かせながら、ゆらりゆらりと誘うように、揺らめくのだ。

わかっている。いくら歩いたって、そこに辿り着く事は出来ない。一歩近づけば、一歩遠ざかる。乾いた身体に心に残酷な夢を見させる、幻の楽園……。

宏美は目を覚ました。暗い天井は窓から入り込む街の光で地味なステンドグラスのように彩られている。ちかちかと緑の光が点滅する。部屋の前にある歩行者用の信号だろう。世界が滅びてしまつて、信号だけが働いている。そう、私は最期の時を迎えた、人類最後の生き残り。そんな想像がふと湧き上がってくる。

宏美は身体を捻って、枕元の時計を見た。午前二時。草木も眠る丑三つ時。また目が覚めてしまった。最近、連続して睡眠を取る事が出来ない。元々寝付きも良い方ではないが、このところ眠りに落ちても二時間ほどですぐに目が覚めてしまう。更年期障害にはまだ十年以上もあるはずだが、四十歳という大きな節目を目前にして、少しずつ体に変化していくのを身に染みて感じる。そう、老化という変化。

ベッドから下り、隣の部屋にある台所へと向かった。ダイニングキッチンのある冷蔵庫を開け、スポーツ飲料の入ったペットボトルを取り出した。きりりとした冷たい液体が喉を通り過ぎて、胃を冷やしていく。すっかり目が覚めてしまったが構わない。どうせ

もうベッドに入ったところで朝まで眠れないのだから。

宏美はペットボトルをぶら下げたまま寝室に戻る。2DKのこのささやかな城を購入したのは五年前だ。ついに結婚は諦めたのかと親には散々嘆かれた。当時はそこまで深く考えてもいなかったが、今となつてはそれが現実のモノとなりつつある。恐らく大地震でも起きない限りはここで生活し、年老いて、腐っていくのだ。きつと一人寂しく。

宏美は窓のカーテンを開けた。暗い通りには人の姿も車の姿もない。信号だけが静かに誰もいない道路を彩り続けている。虚しく寒々しい光景だった。

胸が押しつぶされそうな不安が込み上げる。誰かに繋がりたい。誰かにすがりたい。

宏美は枕元の携帯電話を手にしていた。携帯電話のアドレス帳を開く。

指が素早い動きでキーを押していく。何回押せばその名前が出てくるのか、考えなくても指が覚えていた。

田牧。

その名前と携帯番号が画面に現れる。通話ボタンを一回押せばいい。それだけで田牧の電話が小刻みに震える。田牧の枕元で、宏美の存在を示してくれる。

通話ボタンの上で親指が躊躇していた。ほんのわずかな動きですむのに、その一押しが出来ない。

宏美は想いを叩きつけるように、携帯電話を折りたたんだ。パチンとはじけるような音が闇に響いた。

前の彼氏は五歳年下だった。一途で可愛らしかった。いわゆる甘え上手というやつで、時々「姉さん女房がいいな」などと口にする。その反面、あまりにも頼りなさ過ぎた。少なくともその時の宏美にはそう思えたのだ。三十代も後半になって言う事ではないのかも知れないが、彼と一緒にいると否応なしに「大人」である事を要求さ

れるようで、素直に自分を出せなくなっていた。そんな意固地さが余計に彼を子供に思わせていたのかもしれない。

そんな気持ちが強くなる宏美と対照的に、結婚という二文字にこだわる彼。最終的には宏美の方が腰が引けてしまい、結局別れた。曖昧な態度を続けていく事に疲れた事もあるが、結婚願望が強い彼に自分のような女がいつまでもくっついていては、彼までも婚期を逃すと思ったのだ。もっともその時は自分にもまだまだ次があるなどと思っていたのかもしれない。

年下の男と別れた後、ぱったりと出逢いが無くなった。気が付けば遊び仲間は皆結婚して、子育て真っ最中。電話をしても会話が弾まなくなっていた。子供の話が聞かされるのは面白くなかったし、あちらも「気楽なおひとり様の与太話」に付き合うほど暇ではないようだった。職場のコンパなどと言うものは不景気の影響もあり、ほとんど催される事がなかったし、若い社員はプライベートな付き合いを嫌うので飲みに誘っても付いてくる子はいない。

口の悪い友人には、くもの巣が張るだとか、新品に戻るだとか、さんざんな言われ様だったがなかなか次の恋に走る元気もチャンスもなかった。見た目がどうこうという問題ではない。

歳は確かに三十代も限りなく終わりに近かったが、小柄で童顔の宏美は少なくとも十歳近く若くは見えた。笑うと小さなエクボが頬に浮かぶ。

そんな見た目の若さと可愛らしさとは裏腹に、心は確実に実年齢だった。いや、仕事に追いたてられて、「見た目に似合わず出来る女」を演じ続けて突っ走っている間に、精神的には同い年の友人達よりも年上になってしまったかもしれない。自分よりも仕事の出来ない男は莫迦に見えてしまい、それだけで興味が無くなってしまふ。そんな自分を自覚すればするほど、どんどん結婚という言葉から現実味が無くなっていく。

若い頃「結婚は勢いが肝心」などと言って、スピード婚に踏み切った友人を半ばあきれてみていたが、今になればその言葉がわかる

ような気がする。世間知らずの間に突っ走った友人の勝ちだ。そう、要するに自分は完全にバスに乗り遅れた……。

そんな思いを噛み締めている頃に田牧と出会ったのだ。

田牧は宏美の上司にあたる男だ。宏美は業務部で課長補佐を務めているのだが、田牧は業務部長だった。二年前に本社から赴任してきた。地方の支店の業務部長にはもつたいないような、いわゆる出来るタイプだ。それほど男前ということもないが、大柄でスーツが似合う。一見、怖そうな印象もあったが笑うと意外なくらい親しみのある表情になるのが可愛らしかった。

年齢は宏美よりも八つ年上だ。海外生活の経験があるようで、英語も達人だし、考え方が合理的だった。一般職ながら長年業務で責任ある仕事を果たしてきた宏美を高く評価してくれ、課長補佐として抜擢してくれた。

「貴女の業績を考えると、本当は課長待遇なんだけど。職級の関係もあって肩書きは主任で精一杯だ……。本当にすまない。でも査定はきちんとさせてもらうから、期待してもらっていいよ」

今までの部長とは違い、極めて割り切った視線で宏美の仕事ぶりを見ていてくれた。それが宏美には嬉しかった。

仕事を通して、互いに信頼感が増してくるのがわかった。残業帰りに食事を一緒にする機会が増えた。

田牧と過ごす時間は楽しかった。博学だし、話題も豊富で話も上手い。ウィットに富んだ会話はお洒落で、またそれが様になっていた。田牧もまた宏美とのやりとりを楽しんでいるようで、

「君を見てると日本人というより、アメリカの友人と話してるみたいだよ。もっとも見た目は向こうの高校生並みだけだね」

などといった、悪戯っ子のような視線を宏美に向けてくる。そんな時間は甘口のカクテルのように宏美を酔わせた。

何度目かの食事の時、田牧とそういう関係になった。いつもより少し大目に飲んだアルコールがそうさせたのかもしれないし、わざ

とお互いにそうしたのかもしれない。きつかけは何でも良かった。とにかく、その瞬間から宏美にとって田牧は恋人となった。

よくある話だが、田牧には家庭がある。田牧と同一年の専業主婦の妻、そして大学生と高校生の息子が二人。

「専業主婦って言ってもさ、息子の手も離れてるし、やりたい事やってるよ。ボランティアだの、パートだの、僕なんかお呼びじゃないって感じたな」

田牧はそう言って苦笑いしていた。

「そういうものなんですか？　なんか、寂しいなあ」

宏美は田牧と関係を持つ前に、そう言った覚えがある。

「お子さんの手が離れたら、またご夫婦の時間が持てるんじゃないんですか？」

田牧は顔をしかめた。

「そんなね、外国の夫婦じゃないんだから。ダメだねえ、日本人は二十年も一緒に暮らして、子供育てて、なんてしているうちに、男と女じゃなくなっちゃうね。まあ、確かに家族ではあるけど。息子ももう一緒に遊んでくれるような歳でもないし」

田牧は少しだけ顔を宏美に近付けた。声を潜める。

「日本人夫婦が世界で一番淡泊なんだよ。うちもそのうちの一軒だな」

男はずるいな……。宏美は田牧の囁きに含まれている誘いを感じながら、そう思った。そう思いながらも、嫌な気分はせず、むしろ心のどこかが甘く疼いたのだ。誘われる事を期待している自分もしつかりずるい女だ。その時は、そう思えた。

田牧は月に一度か二度、部屋にやって来た。いつも玄関の扉が閉まるか閉まらないかのうちに、壁に宏美の身体を押し付けて唇を貪る。大柄な田牧が覆いかぶさるようにして宏美の自由を封じ込めると、ややもすれば倒錯した快感に襲われる。そして頬にかかる田牧の荒い呼吸は宏美の身体を熱くし、更に淫らな気持ち煽るのだ。

今まで付き合った男の数はそれほど多い訳ではないが、それでも片手では足りなかった。田牧は中でも一番上手い。宏美の耳に媚薬のような淫らなささやきを注ぎ、宏美の身体の隅々をくまなく指と唇と舌で探索し、快楽を呼び覚ます部分を探り当てていく。時には粘つくく、時には乱暴に、時には優しく……。繋がるまでに何度も悲鳴にも似た喘ぎが口をついた。

宏美の悶える姿を見るのが田牧にとってはたまらない喜びのようだった。

「俺だつてまだまだイケるって思うんだよ、宏美が乱れるのを見るよ」と

笑いながらそう言ったことがある。

ああ、そうか。そういうことなのか……。宏美はベッドの中でちよつと白けた気分になった。

私を愛しているとかが、そういう次元の話ではなく、女を狂わせるようなセックスが出来る、その能力を確かめているだけなのかもしれない。自分の老いを認めたくない、それだけなのかもしれない。

もっとも自分もそうだった。田牧の責めに溺れながら、自分もまた田牧の身体に貪りつく。田牧の分身に自らの舌を絡め、舐め上げる。口に含んで攻め立てる。時には田牧を押し倒し、自分から激しく動いた。田牧が顔を歪め、振り絞るような唸り声を上げるのを見下ろしながら、ますます欲情する自分を止める事が出来なかった。

それは自分が「女」であると実感する瞬間。

宏美と田牧はもしかしたら恋人同士などではなく、いわば同じ目的を持った「同志」なのかもしれない。

そんな関係が一年ほど続いた。

「しばらく会えないかもしれない」

いつもなら玄関先でまず求めてくる田牧が、神妙な顔でいきなり切り出した。

「どうしたの？」

宏美は怪訝な顔で訊いた。田牧は珍しく言葉を濁しながら突っ立っている。

「上がって。ちゃんと話して」

見慣れない田牧の態度に不安が掻き立てられるが、宏美はそれを押し殺し、努めて落ち着いた口調で田牧を促した。

田牧はようやく靴を脱ぎ、上がりこんだ。

リビングのソファに腰をかせせると、宏美は食器棚からカップを二つ出し、二人分のコーヒーを入れた。

田牧に手渡す。

「どういうこと？ 長期出張？」

「いや。……プライベートで、ちょっと」

「何、奥歯に何かはさまったみたいない方しないでよ。なんか気持ち悪い」

宏美は軽い口調でそういつてみたが、不安がますます募る。

「ねえ、プライベートって、おうちで何かあったの？」

訊いてどうするのだろうかとう自分で思いながらも訊かずにはいられなかった。

田牧は随分と躊躇っていたが、宏美が目で何度か促すと観念したようだった。

「……家内が入院する」

低い声でぼつりと言う。

「…入院……」

宏美は言葉に詰まった。

「交通事故。スクーターに乗ってて、左折車に巻き込まれた。大腿骨骨折だつて。手術して三ヶ月ほど入院する」

「三ヶ月……お気の毒に。でもよく助かったわね」

「ああ。一歩間違えれば取り返しがつかないところだった」

田牧はそう言うとコーヒーを飲んだ。

気まずい沈黙が訪れる。

不倫相手の妻の入院。田牧としては妻が入院している間に愛人と

いちゃいちゃしている気分ではないという事なのだろうか。

「……しばらくは俺も病院通いだ。息子達と交代だから、三日に一度か」

「……」

「家の事も少しはしないとだめだし。男ばかりってのはこういう時困るな。娘がいれば良かった」

なんとなく白々しい笑い声。

「リハビリが結構時間かかるらしいんだよ。毎日あるらしいけど」「いいのよ、無理に理由つけなくたって」

宏美は田牧を遮った。

「家族なんだから、当然じゃないの」

そう、私は「女」だけど、奥さんは「家族」なのだ。当然「家族」の方が優先順位は上に決まっている。田牧が言葉をつなげる度に、その事実を目の前に突きつけられるようで、どんどん惨めな気分になりそうだった。

「私になんか構ってる場合じゃないでしょ」

宏美はできる限り平静を装った。私の心は何も感じていない。傷ついてなんかないから、痛みだつて感じない。そう、私は全然平気。心の中で呪文のように唱え続ける。

「普段奥さんの事粗末にしてるんだから、こんな時くらいは奥さん孝行するモンよ」

宏美はそう言うのとコップを持ったまま立ち上がった。飲む気が全く無くなった。流しにコーヒーマグを捨てる。褐色の液体が排水溝に流れ込むのを見つめながら言った。

「今日はもうこのまま帰って。その方がいいでしょ、お互いに」

「そうだな。……そうするよ」

田牧の声が聞こえる。

田牧は立ち上がるとテーブルの上にコーヒーマグを置いた。

「ご馳走様。落ち着いたら連絡する」

そのまま玄関に向かう。宏美は少し遅れて後に続いた。田牧は靴

を履きながら独り言のように言った。

「大人の女はものわかりが良くて助かるよ……」

身体を起こすと、ほっとしたような笑顔を宏美に向けた。

「じゃあ、また」

そして玄関の扉を開けて、出て行く。ボタンという扉の閉まる音が虚しく響いた。

宏美はそのままずるとその場に座り込んだ。「大人の女」という言葉が勝手に頭の中を歩き回っている。

「大人の女」である事が疲れたのではなかったのか？ だから年上の田牧に魅かれたはずだったのに、またまとわりついてくる。いや、以前とはまた違った響きを感じていた。「大人の女」は「ものわかりが良い女」。会えなくなっても文句を言わない、遊びには都合の女。結局、自分から「都合のいい女」というポジションを選んではまった。今時の言葉で言うところ、ただのセフレだ。そんな軽薄な関係ではないと思いたかったが、とどのつまりはそういう関係だ。のろのろと立ち上がり、田牧の残していったコーヒークップを片付ける。自己嫌悪が心の中に降り積もっていくのを感じていた。最悪な気分だ。

新しい週が始まり、宏美は重苦しい気分を引きずったまま出勤した。会社に出勤すると当然、田牧と顔を合わす。田牧は何事もなかったかのようにいつも通りに振舞う。宏美から報告書を受け取り、印を押し、それを宏美に手渡す。空々しい会社用の笑顔で仕事をねぎらう。そして宏美も営業用の微笑を浮かべながら、それに合わせる。

嘘っぱい笑顔と会話を交わすたび、心の壁に引っ掻き傷が増えていく。その傷は日毎にじくじくした熱とどろどろの膿を持っていくような気がした。

シャンティ（前書き）

不倫関係にある田牧の妻が交通事故に遭い、宏美は田牧と会えない日々が続いていた。平静を装いながらも、心の中には押さえきれない思いが渦巻いていた……。

シャンティ

2 .

金曜の夜。残業を終え、宏美が会社を出たのは九時を回っていた。今までならどこかで田牧と落ち合って、食事を取ることが多かったがそんな事は当分ありえない。田牧は定時に帰宅していた。かといって、今からマンションに帰って夕ご飯を作ろうかという気にもなれなかった。

ぶらぶらと宏美は駅に向かって歩き始めた。どこかで一人寂しく食事を済ませよう。なるだけ寂しさを感じないような場所がいい。話し相手が欲しかった。

「……そうだ」

駅から少し離れたところに無国籍料理を出す居酒屋がある。一度同僚と行った事があった。アジアンテイストの内装が好評だった。料理はベトナム風、中華風、タイ風、チベット風、節操がないとも言えたが、色々な味が楽しめる。日本人向けの味にしてあるようで食べられない香辛料の匂いも思ったよりは気にならず、程よい異国情緒を味わえたという覚えがある。あそこは田牧と一緒に行ったことはない。それもまた良かった。今は田牧の匂いのしないところがいい。

宏美はうる覚えの記憶を辿りながらその店を目指した。途中で何度か立ち止まり、引き返してみたりしながらもなんとか目的地へと辿り着いた。

黒っぽい色の丸太を多用した、如何にもエスニックという感じの店構えで、おおきな木の看板には白い飾り文字で「シャンティ」と書かれてあった。

扉を開けて中に入ると、少し暗い目の照明の中に広いカウンターが目に入る。カウンターには十席、奥に四人掛けのテーブルが二つ。それほど広くない。客は奥のテーブルに四人、カウンターに二人ほ

どいるだけである。

「いらつしゃいませ」

カウンターの中にいる男が落ち着いた声で宏美を迎えてくれた。

「何人様ですか？」

宏美は黙って人差し指を立てる。

「こちらへどうぞ」

男は手でカウンターを指し、宏美は言われるままその席へとついった。

カウンターの中には五十歳くらいの恰幅の良い、頬から顎にかけて短い髭を蓄えた男と、三十前後の細身の男が入っている。二人とも黒いバンダナで頭を覆い、黒っぽいエプロンを付けている。年配の方が店主だ。

宏美はメニューを広げた。この手の店は何度か来たことがあるので、メニューもだいたいの見当はつく。野菜のカレーとナン、そしてパイナップルビールを注文した。

店内には抑えた音量でインド音楽らしきBGMがかかっている。

宏美は黙ってそれに耳を澄ましながら、水を飲んだ。

「こちらは初めてですか？」

若い方の男が声をかけてくる。

「え？ ああ、いえ、二回目かな」

宏美は少し考えた。

「一年くらい前かな、一度来たことが」

「ありがとうございます」

細面に切れ長の目が印象的だ。かなり細身だが、Tシャツから伸びている腕にはしなやかな筋肉がついている。ストイックで綺麗な腕だなと、宏美は思った。

「お仕事帰り、ですか」

「はい」

「随分遅い時間まで働いていらつしゃるんですね。お疲れさまでした」

男の言葉に宏美は小さく笑った。

別の客が入ってくる。男はすつとそちらに顔を向け、訝えた声で「いらつしゃいませ」と言った。耳元から鎖骨へと綺麗な斜めのラインが目についた。

宏美が食事をしている間、時々店主とその男が声をかけてくれる。宏美はぽつりぽつりと答えながらゆっくりと食事を済ませた。食事が終わってほつと一息つくくと、目の前に熱いチャイが出てきた。

「え？」

怪訝な顔で目の前の店主を見る。店主は髭の顔に愛想の良い笑みを浮かべていた。

「サービスです」

「ありがとうございます」

ふうふうと息を吹きかけて、一口飲む。少し考えてから砂糖を一匙入れた。

ほのかな甘味とシナモンの香りが口の中に広がり、食事の後口を消してくれる。

「調子に乗って随分食べちゃった。太るかな」

苦笑いしながら呟くと目の前に立っていた若い店員がふと顔を上げた。

「そんな心配するようなスタイルじゃないですよ」

「そんなことない」

「女性はすぐに太る太るって気にされますね。全然そんな事ないのに。日本の女性は痩せすぎですよ」

真面目な顔で宏美を見る。

「そんな事言うけど、やっぱり細い女の子の方がスタイル良いって言われるんだもの。それに太るって自己管理能力を問われるって言うじゃない？」

宏美は肩をすくめた。

「会社勤めしているとどうしてもそういう目で見られるし。習慣み

たいなもので、太るのが怖い」

その店員は「わからない」と言いたげに、小さく首をかしげた。ふと田牧の顔を思い出す。

子供を二人産んで、子育てに追われて二十年経った今、妻の裸を明るいところでは見たくないと愚痴っていた。

妊娠する事で腹筋も肌も極限まで引き伸ばされる。脂肪には裂け目、妊娠線が残る。その線は一生消えることはない。それだけではない。産後、元のしまった身体に戻すのは至難の業だ。自分の母親もそうだった。「なんでこんなにぶよぶよなの？」そんな事を言いながら母の下腹部を摘んでは怒られたものだ。

田牧の言葉は女性に対してとんでもなく失礼で残酷だと思いつつ、その言葉の中に宏美の身体への賞賛が込められているような気がして意地の悪い優越感を感じたものだ。

そんな事を言っていた田牧も、結局は自分より妻の方を優先する。わずかな美醜など、その順位を変える要因にはなりはしない。

宏美は顔をしかめた。やめよう、今は田牧の事なんか考えたくない。

ふと時計を見ると十時をかなり回っていた。随分とのんびり食事をしていたらしい。

宏美は立ち上がるとレジの方へと向かった。カウンターの店員がすべるようにレジに入る。

「ご馳走様。美味しかったです」

「ありがとうございます。良かったら、これ、書いていただけませんか？」

店員がメモを差し出した。住所、氏名、生年月日、店への要望を書く欄が設けてある。

「誕生日にはカードをお送りしています」

宏美はレジの横に置いてあるボールペンでメモに記入していく。

「誕生日、もうすぐなんです」

店員が手元を覗き込みそう言った。

「ええ。何歳になるかは、内緒」

宏美は笑いながら書き上げたメモを店員に渡す。

「ありがとうございます。是非お越し下さい。サービスさせていた
だきますから」

店員は丁寧に頭を下げた。真面目な人なのだろうな、ふと、そんな事を思った。

一ヶ月が経った。宏美はいつもと変わらず出勤し仕事をしている。田牧とはほとんど毎日顔を合わせてはいるが、仕事の話以外はほとんどすることがなかった。田牧は憎たらしい程ポーカーフェイスで、いつものなんら変わりなく宏美に接してくる。宏美も平静を装ってはいるが、内心は行き場のない嫉妬心と憤りで満ちていた。

週末が来るたび、苦しくて仕方がない。一人で過ごす週末の夜の長く、もどかしい事。暗い部屋の中で田牧と過ごす時間を想い起し、どうしようもない程に田牧を欲しいと思う。身体の芯を指で弄られる感覚がふいに甦り、腰が砕けそうな程に女の部分が疼く。

情けなかった。自分がこれほどまでに田牧に溺れているなんて思いも寄らなかった。いや、会っている時にはこんな事はなかったのだ。会えなくなつて初めて、身体も心も乾ききる程に田牧を切望する自分に気がついた。

どうしようもなくなつて、自分の指で自分の身体をなぞってみる。田牧がするように、胸の頂を摘み上げ、なで上げる。足の付け根に指を這わせ、いじましく震える唇へと滑り込ませる。蕾をこすりながら、蜜壺をかき混ぜながら、田牧の熱い欲望の塊の感触を想像する。一瞬の昂ぶりに身体を引きつらせた後、今度は自己嫌悪のどん底に落ち込む。

男が欲しくて自分で慰める。自分がそんな情けない、淫乱な女だったなんて。そう思うと涙が滲んでくる。それでも気持ちを抑える

事は出来なかった。

田牧に会いたい。会って思い切り罵倒してやりたい。そして壊れるくらい激しく抱いて欲しい……。

宏美宛の誕生日カードが届いた。鮮やかで賑やかな原色の版画。タペストリーの柄のようだ。アジアの香りがする。送り主は「シャンティ」とあった。

「あ、あそのの……」

若い店員の顔を思い出した。

そう言えばアンケートカードを書いたのだった。すっかり忘れていた。

カードには几帳面な小さな字でコメントが添えてあった。

中川宏美様

お誕生日おめでとうございます。

当店の料理は健康と美容に効く様々な香辛料を使っております。

美貌に更に磨きをかけるべく、またお越し下さい。

思わずくすつと笑ってしまった。内容からして、あの若い店員が書いたのだろう。大勢客がいるだろうに、この間のつまらないスタイル談義を覚えていてくれたとは。少し嬉しくなった。

カードの隅には営業時間が書いてある。どうやらランチタイムの営業もあるようだ。次は昼間に行ってみよう。ふとそう思った。

宏美がシャンティを訪れたのは土曜日のランチタイムだった。二ツトのコートにジーンズ、そしてブーツ。出勤の時にはジーンズは履かないようにしているが今日は休日だ。いつもよりは軽やかな気分で行きたい。

シャンティに着いたのはまだ十一時半だった。扉を開けるとまだ客がない。

「あら、一番乗り?」

思わず呟くとカウンターのの中の店員が振り向いた。あの若い男だ。「いらつしゃいませ。……ええっと、中川宏美様、でしたよね?」切れ長の目にふわりと微笑みが浮かぶ。

「覚えてくれてるの? 凄い記憶力!」

宏美は目を瞬かせた。

「忘れませんよ。大切なお客様ですから」

宏美は笑いながらカウンターに着いた。この前と同じ席だ。

「特に美人は忘れない」

店員は澄ました顔でそう言ったものの、直後に決まり悪そうな表情を浮かべた。思わず宏美は笑い出した。

「案外お口がお上手ですね」

「……お世辞じゃないですよ。ランチタイムのメニューになっております」

店員は困った顔のままメニューを差し出した。

「はいはい、額面通り受け取らせて頂きます」

宏美はクスクス笑いながらメニューを受け取った。他愛ないリッブサービスだが悪い気はしない。

宏美はメニューに目を通した。朝はゆっくり寝ていたから朝食は食べていない。この食事が朝昼兼用、ランチだ。いきなりカレーでは胃がびっくりするだろうか。

「野菜中心のカレーもありますし、辛さも調節させてもらいます」

宏美の心を読んだようなタイミングに宏美は小さく肩をすくめる。しばらく悩んだ末、ほうれん草のカレーとナンのコースを注文した。店の中には既に強い香辛料の匂いが満ちている。匂いだけでも元気が出そうな気がする。

「お仕事はお近くですか?」

店員がお冷を出しながら声をかけてくる。

「ええ、駅前の第四ビルの中」

「じゃあ、かなりの大手ですね。格好いいじゃないですか」

「そんなこと……」

宏美は自分でも気付かないうちに、かすかに唇をゆがめていた。確かに駅前の第四ビルといえば大手有名企業のオフィスが入っていることで有名だ。そして宏美の会社も世間的には名の通った会社である事には違いない。だからと言ってそこに働く自分が格好いいとはとても思えなかった。

四十歳目前のお局様。仕事は出来るけれど所詮は一般職。どんなに頑張ったところで所詮主任止まり。同じ女性でも総合職で四十歳の同僚（正確には二年後輩）は既に本社へと異動し、管理職としてバリバリ働いている。そう言えば先月、育児休暇明けの女性職員を支援する「ママ・サポート・プロジェクト」の責任者として社内報に載っていた。彼女は確かに格好いい。それに比べて自分は子供どころか、結婚すらしておらず、拳句に不倫と来ている。

「全然格好良くない。もう、ね、どん底ですよ」

宏美は自嘲した。負け組という言葉が頭に浮かび、大きな溜息をつく。

「ダメだ」。最近どうも被害妄想というか、卑屈になっちゃって。どンドンブスになっていく自分が怖い……「デス」

ちよつとおどけては見せたが、全くの本音だった。

「……そんなこと。誰にでもありますよ。僕も覚えがあります」

店員が呟くように言った。宏美は店員を見上げる。彼の目は宏美を映していたが、宏美の後ろの、もっと遠くを見ているようにも見える。

「その頃は……どん底で、自暴自棄になって。最悪でした。今日まで生きているのが不思議なくらい」

「……」

「まあ、こうして生きてますけどね」

店員は小さく肩をすくめてみせた。

「そう……。生きていれば、そんな事もあるわよ、ね。一回二回は」
宏美は妙な安堵感に包まれていた。理由を聞かれる訳でもなく、

励まされる訳でもなく、可哀想がられる事もなく、ただ、同じ思いを味わった事がある。ただそれだけの事。なのに心の中の澱みが静かに流れ出していくような気がした。

厨房からオーナーが顔を出す。

「慎！ ちよつと！」

「はい。失礼します」

店員は軽く頭を下げると厨房へと消えていった。あの店員の名前は慎と言うのか……。宏美はその名前を口の中で静かに繰り返し返していた。

宏美は週末毎にシャンティに通うようになった。カウンター席はすっかり宏美の指定席となり、オーナーとも親しく話すようになった。

オーナーは原田と言う。ぱつと見た目は髭もじやの大柄な、なにやらつかみどころの無い怪しい男のようにも見えるが、話していると明るく気さくな、飾り気のない人柄という事が伝わってきた。髭の中に浮かべる笑みが屈託なく、可愛らしい。それと同時に力強さと懐の深さを感じさせる。

原田は若い頃から飲食業界で料理と経営の手腕を磨いてきた。そして、数年前にアジア各地を放浪し、帰国してからシャンティを構えたとの事だった。英語とヒンドウ語を喋ることが出来るそうだ。ちなみにシャンティとはサンスクリット語で「平和」という意味らしい。

「人は旅をすると平安を切望するようになります。まさにそんなところかな」

アジア各地を放浪した原田にとってはこの店が「シャンティ」そのものなのだと、原田は髭モジヤの顔に明るい笑みを浮かべてそう言った。

若い店員、慎は山村慎と言う。元々は板前だったが、インドに旅行した事がきっかけとなりエスニック料理にハマッたらしい。そし

て知人の紹介でここ、シャンティで働くようになった。ちゃんと聞いたことはないが宏美と似たような世代、もしかしたら少し若いかもしれない。しかし、慎は会社の同世代の男性に感じるような俗っぽさがなかった。控えめに淡々と話す姿はまさに職人、ストイックさと素朴さが同居している感じがした。今は原田から少しずつ経営について教わっている途中だという。

もっとも料理人の腕ほど、接客業の腕前は確かではないようだ。宏美がランチサービスに行った時の「特に美人は忘れない」と言う台詞は、彼にとって精一杯の言葉だったことがだんだんわかってきた。どうやらそれ以上、凝った事はまだ口に出来ないようだ。

「時々僕の台詞をパクるんだから」

原田が宏美にそう囁いてクスクス笑った。

「慎のヤツ、あいつ口下手というか、普段あんまり喋らないから思いつかないんだろうね。僕のセールストークを必死で聞いて盗もうとする」

「で、習得出来そうなんですか？」

「莫迦言っちゃいけない。若い頃はそれこそホストまがいの事までしてたんですよ、僕は。その僕が三十年かけて体得したこの話術を、あんな朴念仁が三年やそこらでマスターできる訳ない。それに、あいつは僕と違って、女性にもてない」

「ひどい言い方」

少し離れたところでデザートの盛り付けをしている慎を見て二人でクスクス笑った。慎はじろつと視線を投げてきたが、黙々と作業を続ける。しばらくしてデザートの入った器を宏美の前におきながら、

「聞こえてましたよ」

口をへの字にする。そのうらめしそうな表情に原田は豪快に笑い、宏美は横を向いて必死で笑いをこらえた。

他愛ない会話が宏美のささくれ立った心を少しずつほぐしてくれていくのがわかる。そして何より、シャンティにいる間は田牧の事

を考えなくて済む。それが宏美にとってなによりの癒しだった。

課内の女の子の一人が出産を期に退職することになった。その送別会が開かれたのは師走に入ってすぐだった。忘年会には少し早いし、主役が妊婦という事もあって宴の席は居酒屋ではなく、ちよつとお洒落なイタリア家庭料理の店になった。小さな店なので十四人全員が参加したらそれだけで店はほぼ満席となった。事実上の貸切状態で、他の客への遠慮もなく和やかに食事は進んでいく。

宏美は少し離れた席で部下である樹里と話しながら、今日の主役である上田を眺めていた。八ヶ月になるという大きなお腹を抱えて上田はけらけらと笑っている。

「よく八ヶ月まで頑張りましたよね」

樹里は上田と同期で入社して一番仲が良い友人だったようだ。モデルのようなスレンダー美人でしっかり者の樹里と、ぽつちやりしたマシユマロ系で天然ボケの上田は凸凹コンビとして社内でも有名だった。

「結構大変だったんですよ、悪阻つわりもあったし」

「そうね」

ロッカールームで青い顔しながら休憩している上田の姿を宏美は思い出していた。

「ほんとよく頑張ってたよ。うん。うちの姉がすごい悪阻がひどくて入院したりして、それ見てたから上田って凄いなって。感心してたんです」

樹里は宏美の顔を見て嬉しそうに笑う。

「よく主任が女で良かったって言っていましたよ。男にはわからないもんね」

宏美は曖昧に笑った。少し心苦しい。正直、妊婦の大変さなど想像がつかない。樹里のように姉や妹もおらず、身近に妊婦がいたことがないのだ。口に出した事こそないが、しょっちゅう体調不良で

休憩している上田の姿に、時折苛立ちを感じたものだ。何がそんなにしんどいのか。私は風邪をひいて熱があっても仕事をしていることがあるというのに……。比べてはいけないと思いつつも、冷たい感情で顔色の悪い部下を見ていたこともある。

自分には何か足りないものがある。何が足りないというのか……。ほんのりと頬を染めながら陽気に笑っている上田を見ながら宏美はもやもやした黒い霞が身体に充満してくるのを感じていた。

送別会が開きになり、二次会チームと帰宅チームに分かれる事となった。

「主任はどうします？」

二次会チームの上田が宏美を誘う。

「上田さん、大丈夫なの？ 二次会参加して」

宏美は上田の膨れたお腹を一撫でした。

「大丈夫です！ お母さんが楽しいと子供も楽しいのです！！」

「ちよつと、飲んだの？」

上田のテンションの高さに心配になる。上田はけらけら笑った。

「いいえ、さすがにアルコールは。でもなんか、楽しくって」

仕事がなくなるというだけでもストレスは減るだろう。天然ハイと言っことだ。

「悪いけど、私はここで失礼するわね」

「え〜」

上田が抗議の声を上げる。このテンションの高さに快く付き合えるような心境ではなかった。そんな気持ちで無理に二次会に付き合っつて、部下を見送るといっても失礼な話だと思う。ここは失礼した方がどちらにとっても得策だと思えた。

「身体、大事にしてね。生まれたら連絡頂戴よ」

「はい！ 主任、お世話になりました」

上田は深々と頭を下げるといきなり泣き始める。

「主任には……いっぱいご迷惑をかけてしまって。本当にありがとうございました。私にとって主任は会社のお母さんでした」

宏美も唐突に込み上げてきて、思わず言葉につまる。上田はべそ
べそ泣きながら宏美に抱きつこうとして、

「お腹が邪魔でハグ出来ない」

と叫ぶ。思わず宏美は嘔き出した。こういうとぼけたところが彼
女の長所だった。ムードメーカーとして随分助けられた。きっと退
職して、良いママになるだろう。

二次会チームを送り出し、残りのメンバーと共に夜道を歩き出す。
駅に着くと皆がそれぞれの方向へと散っていき、宏美は一人になっ
た。

電車に乗り込み、扉の近くに立つ。暗いガラスは不鮮明な鏡とな
って宏美の顔を映し出していた。

ガラスに映る自分の顔をぼんやりと眺める。普段は童顔で若く見
られることが多いが、今日は随分と生気のない寂しげな顔に見えた。
会社のお母さんなどと言う顔には程遠い。疲れた顔をした寂しい中
年女の顔だ。

上田の満たされた表情を思い返しながら宏美は自問する。自分に
は一体何が足りないのか。

宏美は身体の向きを変え、扉に背中を預けた。これ以上自分の顔
を見るのは嫌だった。

鎮痛剤（前書き）

田牧と会えない時間をなんとかしようと思美はシャンティに通う。
しかし田牧の姿を見るだけで禁断症状にも似た苦しみを味わう思美。
そんな彼女の心を、わずかに和らげてくれる存在が現れる。

有名百貨店の特設フロアーで有名な画家の個展が開かれていた。

日本画家として名前が通っているが、中国を始めアジア諸国に造詣が深いその画家はしばしばシルクロードをテーマにした作品を描くことも知られている。今回はそのシルクロードを描いた作品を中心に展示しているという事だった。

日曜日に宏美はその個展を訪れた。開店して間もない時間だったが、師走の百貨店は賑わっていた。もつとも上の階に行くほど人の数は減り、個展会場の人影はまばらだった。ゆっくりと一枚一枚見て歩くには丁度いい。

宏美は順路に従いながら、時々行きつ戻りつしながら、ゆっくりと見て回る。仏像の絵、異国の街並の光景、美しい装いの少数民族の娘の絵。ちゃんとした完成品というよりはクロッキーが多い。しかしあつさりとした素朴な筆致の中に異国の匂いが漂っている。どこかで観た事がある絵も多く、特に月の砂漠に行くキャラバンの絵は宏美も知っていた。

しばらく展示物を観て回っていたが、一枚の絵の前でぴたりと宏美の足は停まった。

「楼蘭」とタイトルがつけられたその小さな絵は、砂漠と遠くに揺らめく蜃気楼が描かれていた。ほとんど素描の黒い線だが、わずかに水彩色鉛筆のような淡い色彩が施されている。宏美は吸い込まれるようにその絵を見つめた。

熱い砂漠の遙か彼方に、揺らめきながら浮かび上がる幻の都。夢とも現とも区別のつかない儂い楽園。歩いてても歩いても辿り着かない砂漠のオアシス……。旅人達を惑わし、苦しめる楽園。

宏美は足元が揺らめいているような錯覚を感じていた。立ち上る

熱気と踏みしめても崩れていく足元の砂。どうしようもない乾きに苦しめられ、塵気楼に翻弄される旅人。それはまるで、今の自分のようだ……。

「中川さん？」

突然誰かが後ろから声をかけた。無想を破られた宏美は吃驚して振り向く。そこには一人の男性が立っていた。

「ああ、やっぱりそうだったんだ。よく似た人がいるなあ……って思ってたんだけど」

はにかんだような微笑を浮かべる。一瞬わからなかったが、その笑顔でやつと気がついた。シャンティの慎だ。

「ああ、吃驚した！」

宏美は思わず大声になり、慌てて声を落とした。

「偶然ですね」

そしてまじまじと慎を見る。何かいつもと雰囲気が違う。

「あ、そうか、バンダナ……」

いつもはバンダナで額から上は隠されているが、今日はバンダナがない。少し広いめの額と黒いしっかりした髪。いわゆる無造作ヘアという雰囲気で自然な乱れ方だ。いつものシャープなイメージが和らぎ、普通のお兄ちゃんといった雰囲気だった。慎は照れくさそうに自分の髪をかき上げた。

「絵、好きなんですか？」

「慎が尋ねる。」

「う、うん……」

宏美は苦笑いしながら曖昧な返事をした。正直なところ絵画に興味があるかというところでもない。

「好きって言えたら格好いいんだけど、実はあんまり興味ないかも。てへつと照れ笑いをして見せる。」

「あ、でも仏像とか遺跡とかは好きなんですよ。シルクロード展って書いてあったから観にきたの」

「そうなんですか」

「慎さんは？」

「いや、僕も実はさっぱり。たまたま買い物に来たんで、ついでに」
「なんだ」

二人とも顔を見合わせて小さく笑った。

「もう観終わっただんでですか？」

「はい。今から出ようかなって思ってたなら、中川さんを見かけたものだから」

「そうですね、私ももう出ます」

二人は自然に出口の方へと歩き出した。薄いベニヤ板で囲われた安普請の出口を出ると、ポストカードやTシャツを売るワゴンが並んでいる。大きなポスターなんかも置いてあった。

「何か買います？」

「いえ、いいです」

そのまま販売エリアを素通りして通路へと出た。展示会場と同じフロアーにはフードエリアがあり、そろそろ昼食を取る人々で込み始めていた。

「あの、もうお帰りですか？」

宏美は慎を見上げた。カウンターのの中に入っている時には気付かなかったが、慎は宏美より頭一つ分いや、それよりも少し背が高い。

「良かったらコーヒーでもどうですか？」

何気なく誘ってみる。どうせこれから一人で昼食を取るのだ。連れがいた方が気が紛れる。

慎は驚いたような顔で宏美を見たが、ふわっと微笑んだ。

「お昼時だし、そうですね、軽く食事でも。幸いまだ空いてる店もありそうだし」

二人は辺りを見回し、店を物色した。しばらく意見交換をした後、洋食中心のレストランに決定した。ここならなんでもありそうだ。

二人は店に入ると四人掛けの席に向かい合って座った。注文を取りにやってきた若いウエイトレスに宏美はサンドイッチセット、慎

はランチセットを頼んだ。

「でも奇遇ですね、こんな所で会うなんて。それもお互い全然絵とか好きじゃないっていうのに」

「本当に。でも、中川さん、最後の絵は随分熱心に観てたじゃないですか。だいぶ長い時間、あの前に立ってましたよ」

「……ああ、あの絵」

楼蘭の姿が宏美の脳裏に甦る。

「なんか妙に、こう、心惹かれるっていうか……。楼蘭って言葉の響きが好きかな」

「なんだか曖昧な答えになってしまふ。自分でも何故吸い込まれるように見入っていたのか、わからないのだ。」

「ポストカードとか、買えばよかったのに」

「ううん、そんなんじゃないんですよ。それに、なんか寂しい絵だと思つて。そんな寂しい絵、家に飾つてたら余計寂しいじゃないですか。只でさえ寂しいお一人様なのに」

宏美は苦笑いした。

「一人？」

慎が首をかしげる。

「そ、一人暮らしデス。あゝ、それ以上は聞かないでね」

宏美は手で制する真似をした。慎は肩をすくめる。

「聞きませんよ」

慎はグラスの水を一口飲み、顔をしかめた。

「……カルキ臭い」

「え？」

宏美も一口飲んでみる。言われて見ればそのような気もするが、宏美にとっては気になるようなレベルでもない。ふと慎が元々は板前だったという話を思い出す。和食の料理人の経験があれば、舌は敏感だろう。

「板前さんだったんですね」

「ええ、十年くらい前の話ですけどね」

「和食とエスニックじゃ、随分勝手が違うでしょう？ 味だって匂いだって凄い強烈だし」

「そうですね」

慎は小さく頷いた。

「だから今の僕には和食はもう作れませんよ。エスニックに馴らされてしまってるから。でもエスニックはエスニックなりの繊細さがあるし」

「エスニックの繊細さ？」

「味が深いと思いませんか？ 辛い。確かに辛いけど、辛いだけじゃ旨くない。辛い中に色んな味が入って、色んな食材が入って、それが時間をかけてこなれて、馴染んで、それでようやく旨くなる。

辛さで誤魔化しているような料理を出すような店もあるけど、そんなのは邪道でしょ。まして、ただの辛さ自慢みたいな激辛ナントカとか、何倍カレーなんて料理じゃない」

「確かに」

「トムヤムクンって知ってます？ あれなんか、物凄く辛いけど、本当に複雑な味がする。全ての味が入ってるって言われてるくらいですから」

宏美は頷いた。トムヤムクンは一度食べたことがある。確かタイのスープだった。

「深い旨味があるから、病み付きになっちゃうんですよ。私は香草があんまり好きじゃないから、大好きって訳じゃないけど」

「多いですよ、香草苦手な人。日本人受けしない香辛料も確かにあります」

「あんまり食べつけない物を無理に食べると、お腹壊したりしてね」
宏美の言葉に慎が笑いながら頷いた。

「日本の中で日本人向けに作るなら、多少はアレンジしないとまだ受け入れられにくい部分はあるかも。……そう考えると、やっぱり和食の経験が生きてるような気はしますね」

「ふうん」

宏美は何度も頷いた。店の中では口数の少ない慎だが、料理の話となるとなかなか饒舌である。その語り口調には静かながらも、信念と情熱を感じることが出来た。自分の仕事に対する誇りなのだろう。サラリーマンでこういうタイプはあまりいないような気がする。「慎さんって職人歴どれくらいなんですか？」

「え、高校出てから直ぐにこの道に入ったから……二十年かな」という事は三十代半ばから後半という事か。宏美は密かに計算した。自分よりも少し若いのが、やはり同世代と言ったところだ。

「凄いな、料理一筋で二十年か」

宏美は小さく首を振った。

「そんな事ないですよ。二十年なんて職人の世界じゃザラにある話だし、それに……」

僅かに苦い表情になる。

「僕は途中で脱線してるから……」

そして口をつぐんでしまう。その続きを聞きたい。宏美は脱線して？ と聞こうとしたが、その瞬間ウエイトレスがトレイにサンドイッチセットを載せて現れた。

「来ましたね、どうぞ、お先に」

慎がさりげなく促す。結局その話はそこで終わってしまった。

*

クリスマスが近づいてきた週末。仕事を終えた宏美はシャンティへと向かった。このところ連日忘年会で、いい加減疲れていた。幸い今日は忘年会の誘いもなく、一人ゆっくり食事が出来る日だ。かといって、一人寂しく部屋で夕食という気分にもなれない。休日なら家で料理もするが、平日は外食しなければ家に帰ってもきつと何も食べずにそのまま風呂場へ直行して、寝るだけになってしまうのだ。それではあまりにも味気ない。

それよりもなによりも今日は慎に会いたかった。この間、百貨店

で昼食を一緒にした時間は思いのほか楽しかった。特に何を話したという訳でもないが、いい気分転換だったのだ。

サラリーマンのように学歴だ、職歴だとキャリアを看板にするのではなく、自分の腕と経験で世間を渡っていく職人というのが潔く思えた。自分には真似の出来ない仕事である事は間違いない。

シャントイの扉を開ける。すっかりなじみになった香辛料の匂いがふわりと身体を包み込む。

「いらっしやませ」

カウンターの中原田と慎が同時に宏美の方を見た。自然と頬が緩む。

宏美はぐるりと店を見回した。お客の入りは八割程度だが、幸い自分の指定席が空いている。原田がにこやかにいつもの席を指差した。

宏美は席につくと原田が差し出したメニューを受け取った。

「今日は何にしようかな」

「今日のお薦めはブラウンカレーですよ。食べた事ありましたっけ？」

「うっん」

「レモン果汁がたっぷり入っていてさっぱりしてますけど、結構風味が引き立ってイケます」

「じゃ、それとプレーンのナンで」

「はい」

宏美はメニューを原田に返した。カウンターの中原田と目が合い、慎が小さく会釈する。頬に微笑が浮かんでいるのを見て宏美は少し嬉しくなった。

原田と何気ない会話をしていると、店の扉が開き、数人の男性客が入ってきた。何の気なしにそちらに目をやり、宏美は凍りついた。男性客の中に田牧がいた。連れと話していたが、直ぐに宏美に気が付き一瞬動きが止まる。

「田牧さん、こっちですよ」

連れに声をかけられ、田牧は宏美の後ろを通り、奥のテーブルへと向かった。田牧が宏美の背後をすり抜ける。田牧のコロンの香りがした。

その途端、急激に心拍数が上がり、胸が苦しくなり始めた。どうしようもないくらい心の中がかき乱される。思わず両手で胸元を押さえたが、そんな事で動悸が治まるはずもない。息苦しさで混乱で、宏美は頭がくらくらしてきた。

「原田さん、ごめん！」

宏美は苦しさに耐え切れなくなって立ち上がる。

「用事を思い出した。ごめんなさい、帰らなきゃ。オーダー通ってるわよね？ お金払いますから」

「え？ 中川さん？」

宏美はそのままレジの方へと向かう。原田が慌てて追ってきた。

「どうしたの？ 大丈夫？ なんか顔色悪いよ？」

宏美の顔を覗き込む。宏美は手を振って笑ってみせた。

「大丈夫。ごめんなさい、せっかくオーダーしたのに」

財布を出すと原田が慌てて手で制した。

「五分待てる？ テイクアウトにするよ。慎！ 中川さん、テイクアウト！」

「はい」

慎がちらりとこちらを見ると、すばやく動き始めた。

「ほんと、ごめんなさいね。急ぎの仕事を思い出してしまって。今日中にしなくちゃならないのすっかり忘れてた」

宏美はそう言いながら財布から紙幣を出す。一連の動作をしながらも意識は奥の席の田牧に集中しているのだ。自分でもそれがわかるだけに苦しくて仕方がなかった。

「ごめん、外で待たせてもらいます」

宏美は扉を開けて外へ出た。凍りつくような強い風が吹いている。宏美は身体をちぢ込めた。まさかこの店に田牧が来るとは思いもよらなかった。ここは田牧を忘れるためにきていたのに、これでは意

味がない。

ふいに涙がこぼれる。胸がかきむしられる様な苦しきだった。しばらく忘れていたのに、なんでこんな時に思い出させるのか。酷い男だ。

「中川さん、お待たせしました」

扉が開き、慎が店のロゴの入った白い袋を手に出てきた。宏美は慌てて涙を拭う。

「ありがとう」

包みを受け取る。慎が涙に気付き、顔を覗き込んだ。

「大丈夫、ですか？」

心配そうに尋ねる。

「具合悪いんじゃないですか？ 本当に大丈夫？」

「うん。大丈夫」

宏美はコートの袖で鼻と口を覆った。慎にこんな情けない顔を見られたくない。

「タクシー、呼びましょうか？」

「本当、大丈夫。ありがとう。駅前でタクシー拾うから。ごめんなさい、心配かけちゃって」

宏美は頭を下げると歩き出した。ふと後ろを見ると慎が心配そうに見送ってくれている。宏美は小さく手を振ると、慎も軽く手を上げてくれた。

宏美は逃げるように足早に表通りへと向かった。

ベッドの上に宏美は身体を投げ出し、ぼんやりと天井を見つめていた。シャンティの扉を開けて入ってくる田牧の姿がスローモーションになりながら、何度も頭の中でリピートされる。考えまいと思うのに、また繰り返される映像。なんと自分は莫迦な女なんだろう。皮肉な話だった。田牧と会えない時間が苦しくて、どうしようもなくなくて逃げ場を捜し求めていたのだ。ようやくシャンティという店で文字通りささやかな心の平和を取り戻せたと思ったのに、そ

ここに田牧が現れる。宏美の心をあざ笑うかのように。田牧の手から逃れられない自分が情けない。

テーブルの上にはテイクアウトした包みが手付かずのまま置いてある。食欲はなかった。帰宅するや否や風呂場に飛び込み、シャワーを頭から被りながら泣いていたのだ。ひとしきり泣いてしまうと少しはすつきりした。いや、自分がすっかり空っぽになってしまったような空虚な寒々しい感覚だ。食欲どころか、テレビをつける気にもなれなかった。宏美は目を閉じた。

どのくらい時間が経ったのか。遠くで目覚まし時計が鳴っている。宏美は条件反射のように枕元に手を伸ばし、スイッチを押した。それでも時計は鳴り止まない。

「……？」

閉じようとする瞼を無理やり開けて時計を見る。時計は十時を指している。何がなんだかわからなくてももう一度時計のスイッチを押す。それでも音は止まらない。いや、音は時計から流れているのではないようだ。

「あ」

時計の音ではなく電話の呼び出しだ。ベッドから転げ落ちるよう降りると電話の受話器を取った。

「……はい」

我ながら物凄く不機嫌な声だと思った。地獄の使者も顔負けだ。

セールスの類ならば一発で電話を切るだろう。

「中川さんのお宅ですか」

聞きなれない男性の声。セールスだろうか。

「そうですか」

「シャントイのヤマムラと申します。……恐れ入ります、中川宏美さんはいらっしゃいますか？」

「山村さん……？」

宏美の頭はなかなか働かない。相手の言葉を頭の中で繰り返して

みる。シャンティのヤマムラ、シャンティのヤマムラ、シャンティの……。

「シャンティの山村さん……？ 慎さん？ もしかして」
恐る恐る訊ねてみる。電話の向こうの声がぱつと明るくなった。
「そうです、やっとわかってもらえた。中川宏美さん……ですよね？」

「あ、はい。え、何で？」

宏美は電話を握ったまま戸惑う。何故慎が電話をかけてくるのか。
「アンケート用紙にご自宅の電話を書いてくださってたでしょ？
すみません、ずかずかとお電話してしまっただけ」

電話の向こうで慎が恐縮しているのがわかる。一体何の用なのだろうか。

「そうでしたっけ？」

警戒心が表に出て硬い口調になる。宏美の口調に気付いたのか、
慎が慌てたように言葉をつないだ。

「すみません、お客様に個人的に連絡を取るのにはマナー違反だとは
わかってるんですけど、昨日の中川さんの様子があまりにも気にな
ったので」

「え？」

「あの、大丈夫ですか？ 電話に出ているって事はまあまあ大丈夫
って事なんですよね？」

心配そうな口調で念を押すように訊ねてくる。宏美はあっけに取
られた。

「心配して、かけてくれたんですか？」

「ええ。ちゃんと自宅に辿り着いたのかとか、途中で倒れてるんじ
やないかとか、気になってしまっただけ……。夜のうちに掛けようかと
も思ったんですが、店を閉めてからだと真夜中なのであんまりにも
失礼だなと……。せめて朝になってからならと思って……。いや、
もし途中で行き倒れてたら自宅には辿り着いてないんでしょうから、
余計慌てたんでしょうけど」

慎は一気に喋ると、大きな溜息をついた。

「でも良かった。ちゃんと電話に出てこれたって事は、大丈夫って事なんですね？」

宏美はゆっくりと床に座り込む。

「……ありがとう。大丈夫です。ちゃんと家に辿り着きました。体調も悪くないです、多分」

「そう、良かった」

慎が呟く。宏美は何か気の利いた言葉を返そうと思ったが何も思いつかない。慎もその先の言葉が出てこないようで、電話の向こうで黙り込む。なんとも居心地の悪い、それでいてそれを破るのもつたいないような不思議な沈黙だった。

「じゃ、またお店に来て下さい」

慎が電話を切ろうと口を開く。その言葉にかぶせるように宏美は慌てて喋った。

「あの、昨日のテイクアウトしてくれたカレーとナン。今から頂くんだけど、どうしたらいい？」

何をとぼけた事を聞いているのだろう。そんな事、電子レンジでチンすれば済む話ではないか。なんてマヌケなんだろうか。しかしそんな言葉しか思いつかないのだ。それでもいい、もう少し繋がっていたかった。

「カレーは電子レンジでもいいけど、ナンはトースターの方がいいかもしれない。焦げないように軽くトーストしてもらえたら」

慎は丁寧に答えてくれた。

「わかった。……慎さん」

「はい？」

「ありがとう」

「はい。じゃ、また。お店でお待ちしてます」

慎は丁寧な口調で挨拶すると電話を切った。慎の声の変わりに単調な電話の機械音が流れてくる。

宏美はしゃがんだまま受話器を元に戻した。そのまま壁に背中を

預け、膝を抱える。腕の中に顔を突っ込んだ。

「……やばい」

部屋の空気は冷え切っていて、手も足も冷たい。それなのにどうして頬だけ熱いのだろう。どうして脇の下に汗をかいているのだろう。どうしてドキドキしているのだろう。風邪やらインフルエンザでない事は確かだった。

「ホント、やばいかも……」

*

自分がそれほど惚れっばい質だとは思わない。田牧にしても、その前にしても、二十代の頃にしても、恋人とは年単位で付き合ってきた。二股は掛けられた事はあっても、自分が掛けたことはない。なのに何故、慎の電話にこれほど揺さぶられるのか。田牧に入れ込んでいるのは確かだ。苦しくなるほど田牧を求めているはずなのに、なぜ慎の言葉に中学生のようにドキドキするのか。

そんな自問自答を繰り返していると、会社の中で田牧の姿を見ても息苦しさを感じない。田牧のデスクに書類を持っていくのに、胃が痛む事もない。まるで鎮痛剤のような作用で宏美の痛みを和らげてくれるのがわかる。

宏美の心の中で何かが溶けていくようだった。

田牧との関係をいつまでも続けていて良いはずがない。田牧にとっては所詮火遊びだ。付き合い続けて、将来田牧と一緒にになれるはずもないし、一緒になりたいかと言われて「イエス」とも言えない。刹那的な恋に過ぎない。そんな事は最初からわかっていた。しかし頭ではわかっただけでも感情と身体が納得しなかった。

でも今ならこの麻薬から逃れられるかもしれない。田牧の妻が入院し、田牧が自分から遠ざかりつつある。自分は禁断症状に苦しんでいるが、鎮痛剤のお陰でその苦しみが少し軽減してきた。このくらいならいずれは乗り越えられる。そんな気がするのだ。この鎮痛

劑は気休めだと言われれば、そうなのかもしれないと思う。しかし気休めでもなんでも良かった。とにかく禁断症状を抑えられればそれでいい……。

クリスマスが終わって、世の中は一気に正月気分には模様替えをした。会社は怒涛の十二連休に突入するため仕事の整理に追われる日々が続いた。

宏美は会社の最終日にシャンティへと足を運んだ。正直少しばかり敷居が高かったのだ。どんな顔で慎に会えばいいのかと思うと柄にもなく躊躇するのだ。それでも年内にはお礼を兼ねて行かなければならない。そんな葛藤の末、ついに最終日になってしまった。扉を開けると原田がいつものように陽気な声で迎えてくれた。

「いらっしゃい！」

カウンターの中で慎が少し照れくさそうに会釈した。宏美も内心照れを感じてはいたが、いつも通りに挨拶をした。

「こんばんは」

そしていつもの席にかける。原田がメニューとおしぼりを渡してくれた。

「今日は仕事、残してませんか？」

「はい。ちゃんと全部片付けてきました。正月休みに突入ですからね」

「いいなあ、サラリーマンは。今年は何連休？」

「十二連休」

原田は目を剥いてヒュウツと短い口笛を吹く。

「そんなに休んだらポケちゃいますよ、僕は。いや、ポケる前に飢え死にだな」

「お店のオヤスミは？」

「大晦日は八時でオーダーストップさせてもらいます。正月三が日は夜だけ営業。うちは厨房のスタッフがインドの子なのでね、四月の旧正月に三日ほど休ませてもらうんです」

「そうなんだ……。休み無しかあ。大変ですね」

「サービス業は人が休んでいる時こそ稼ぎ時ですから」

原田は陽気に笑った。宏美の実家は典型的なサラリーマンの家庭で、父は金融関係の会社に勤め、母は専業主婦だ。二つ違いの弟も公務員をしている。カレンダー通りに一年が過ぎていく。カレンダーから外れた生活なんて想像がつかない。

宏美はちらつと慎を見た。一心不乱に盛り付けをしている。相変わらず首筋が綺麗だ。

店の入りは八分程度で少しだがまだ空席もある。しかし年末の追い込みの忘年会らしいグループがはいっているので、満席の時よりも賑やかなくらいだ。

「すみませんね、賑やかで」

原田がカウンターから少し身を乗り出してそう言った。そうでもしなければちゃんと宏美に声が届かない。

「いいえ、大丈夫です。今日はお薦めを適当に見繕ってもらっていますか？ カレーって気分じゃないかも」

「いいですよ。じゃ、そうだな、和風に近い感じでチヨウメンと、サラダと、サモサくらいでどうですか？」

チヨウメンとは麺料理で、焼きうどんによく似ている。サモサはインド風揚げ餃子とでも言ったところか。

「じゃ、それで」

宏美のオーダーを受けて原田は厨房へと消えていく。

宏美はカウンターに肘を置くと頬杖をついた。ぼんやりと厨房を見たり、賑やかな忘年会の集団を横目で見たりしながらゆったりと流れる時間を楽しんだ。やはりここは居心地がいい。

刺激的な香辛料の匂い、肉の焼ける匂い、かすかに流れるインド音楽、厨房で聞こえる訛った英語と日本語、賑やかな人のざわめき、日常を忘れるには丁度良かった。目を閉じると自分の周りに広がる空間は異国のような気がする。まるで自分が異邦人になったような、それでいて、遠く懐かしい記憶が甦ってくるような、不思議な気分

だ。

「大丈夫ですか？」

ふいに声をかけられて目を開ける。チヨウメンの皿を持った慎が覗き込んでいる。

宏美は笑い出した。

「大丈夫！　なんか心配ばかりかけてるみたいで、ごめんなさいね」

「目つぶってるからまたしんどくなったのかと……。紛らわしいですよ」

慎が苦笑いしながら皿を目の前に置いた。

宏美は食事を取りながら時々慎を目で追う。原田とも勿論楽しく会話をしているが、気付けば視界のどこかに慎がいる。

気になる？　いや、気になるとかそう言うんじゃないような気がするけれど。彼が視界にいるとなんだかほっとする。ほっとする？

なんだか言い訳がましい。そう、やっぱり気になるのだ。慎の一挙手一投足が。無駄のない綺麗な動きが。真剣な目で調理をするその姿が。これは、ちょっと気になるクラスメートの男の子をちらちらと横目で眺めている時の気分に似ている。髪をかき上げるクセを見つけたら、鉛筆の持ち方をチェックしたり、小さな発見とささやかな喜びの鎖編み。

いいわよね、これくらいのトキメキ。密かに初恋の気分を味わうくらい許されるわよね……。随分汚れてくれたびれた女になってしまったけれど、これくらいは楽しんだって罰は当たらないわよね。

そんな事をぼんやり考えていたら、宏美はチヨウメンの中の黒い唐辛子をうっかり齧ってしまった。

「ん！」

火のついたような強烈な辛味が口中に広がり、宏美の夢想は一瞬にして飛び去った。慌てて水を飲むが口の中の火事は収まりそうになかった。

破滅の始まり（前書き）

慎の心遣いと淡いときめきのおかげで、ようやく気持ちの出口が見えてきた宏美だったが、会社の新年会を欠席した翌日、田牧が訪問してくる……。

* やや過激な描写が含まれます。未成年の方はご注意ください。

破滅の始まり

4 .

新しい年が始まり、正月休みも終わった。新年会がメジロ押しの中、業務部全体の新年会が行われる事になった。幹事をしている樹里から出欠を訊ねられ、宏美は思わず欠席と答えてしまった。業務全体の飲み会であれば部長である田牧が必ず出席する。今はまだ職場以外で田牧と会うのは避けたかった。ようやく田牧のいない時間が身体に馴染みつつあるのだ。アルコール依存症の治療ではよくあるらしいが、アルコールが身体から抜けかけてきたからと安心してつい一杯飲んだ事で元に戻ってしまう。今の宏美はまさにその状態だった。今、田牧と同じ場所で飲み会なんかに行ったら、せつかく落ち着きかけた気持ちにまた波立ってしまう。

「え、中川さん欠席なんですか？」

樹里は口を尖らせる。

「このところ体調が悪くて。ごめんなさいね」

苦しい言い訳をしながら宏美は両手を合わせた。

「飲みすぎ？ あ、もしかして悪阻つわりとか！」

「ば、か。そんな訳ないでしょう。胃よ、胃」

樹里の軽口に宏美は苦笑いした。それはあながち嘘ではない。秋からこつち、しょつちゅう胃は痛い。勿論ストレスから来る神経性胃炎だ。その原因は田牧の他には考えられない。

新年会は週末だった。その日、宏美は定時に職場を出た。同僚達は六時にオフィスを出発すると言う事で、ほとんどが残っている。田牧はまだ会議から戻っていないらしく、オフィスに姿は無かった。宏美は同僚達に手を振るとオフィスを出た。このままシャンティに行こうかと思っただが、部の新年会をサボって一人他の場所で食事しているところを万が一誰かに見られたら、さすがに体裁が悪い。

仕方なく今日はマンションに帰ることにした。

マンションの近くのスーパーで軽く買い物をして、自分の部屋に戻る。一人用の土鍋で手早く鍋焼きうどんを作り、テレビを見ながらの食事を済ませる。

テレビの音が空々しく響く。少しも面白くなかった。ふと電話の方を見る。

「そつだ……」

宏美は電話の着信履歴をプリントアウトしてみた。普段、固定電話にかかってくる相手は実家くらいなのだが、リストの一番上には見た事のない携帯電話の番号が表示されていた。

慎の電話だ。宏美は携帯電話のアドレス帳を開け、シャンティの電話番号を出してみた。

「お店の電話じゃないんだ……」

宏美は少し脈が速くなるのを感じた。しばらく躊躇した後、その番号を自分のアドレス帳に登録した。

この番号に電話したら慎が出るのだろうか。壁の時計を見ると、まだ八時過ぎだった。営業時間の真っ只中だろう。あの真面目な慎が携帯電話に出るとは思えない。それに出てこられたとしても、話すこともないのだ。

「……」

宏美の視線はしばらくその番号に釘付けになっていたが、親指がつついと動き、通話ボタンを押した。

しばらく空白の時間があり、留守番電話サービスに繋がったことを自動音声が告げる。

「……中川です」

宏美は名乗ってから迷った。何をしているのだろうか、私は。

「家の電話の履歴チェックしていて、この番号見つけて、誰だったかなって思っただけの確認の電話させてもらいました。よく考えたら、皆さんですよ？ すみません」

行き当たりばつたりの言い訳をしどろもどろに告げる。

「またお店行きます。……じゃあ、失礼します」

宏美は電話を切った。心臓が大きく鳴っているのがわかる。

「なにをやってるんだ、私は……」

携帯電話を机の上に置くと宏美は両手で頬を押さえた。なんでこんなに頬が熱いのだろうか。なんでこんなに喉が渴くのだろうか。なんでこんなに……。

宏美は水に濡れた犬のようにぶるぶると頭を振ると、勢いよく立ち上がった。

「お風呂入って寝よ」

翌日は土曜日だと言つのに平日と同じような時間に目が覚めてしまった。たっぷり睡眠を取ったからだろう。とりあえず起きだして顔を洗う。鏡に自分の顔を映してみる。よく寝たからか、いつもよりもふっくらして見える。一時はひどく疲れた顔をしていたが、このところ少しマシなようにも思う。気分的に立ち直りかけてきたからかもしれない。

宏美は洗面所から出るとパジャマを脱ぎ、普段着に着替えた。今日は部屋の掃除をしよう。年末には一応大掃除をしたが、あれから真面目に掃除をしていない。寒いけど窓を開けて、空気を入れ替えよう。そうしたらもつと新鮮な気分になるに違いない。何もかも洗い流してさっぱりしたい。

そうだ、そしてシャンティに行って昼ご飯を食べよう。慎を横目で眺めながら、原田と他愛ない話をして、気楽に過ごそう。

ベランダの扉を開け放った。部屋の中の温かい空気が一気に流れ出し、代わりに冷たい冬の空気が入り込む。宏美は思わず身震いしたが、腕まくりをした。

ベッドを整え、テレビや机の上の埃を払い、掃除機をかけ、洗濯物を干す。一時間もすると部屋の中はこざっぱりした印象になった。窓を閉め、エアコンのスイッチを入れる。微かな作動音と共に、温風が吹き出し始めた。

時計を見るとまだ九時になったところだ。シャンティに行くには早すぎる。お茶でも飲んで一服してもまだ時間は余りそうだった。インターホンがなった。

「？」

宅急便か何かだろうか。宏美はインターホンの通話ボタンを押した。

「はい？」

「……僕だけど」

聞き覚えのある声だった。その声が耳に聞こえた途端、宏美の心臓は締め付けられる。田牧の声だ。

「……どうしたの」

搾り出すような声しか出ない。さっきまであれほど爽やかな気分だったのに、一気に頭が混乱する。

「どうしたのって……昨日、来なかつただろ？」

動悸が上がる。息苦しかった。田牧の声を聞くだけでこれほど苦しい気分になるのに、顔を直接見るなんて耐えられない。帰ってもらおう。そう思うのに、身体は言う事を聞かない。フラフラと糸で繰られるように玄関へと向かってしまう。手が震えながらロックに伸びる。開けてはいけない。開けてはいけない。開けてはいけない。心が叫ぶのを無視して、手はロックを回していた。重い金属音がして、ドアノブが回る。

ゆっくりと扉が開き、田牧の姿が見えた。

「だめ」

宏美はノブを握り、扉を閉めようとした。それより一瞬早く、田牧の足が扉の隙間に差し込まれた。

「なんで？」

扉の向こうから田牧の顔が半分だけ見える。

「やっぱりだめ、帰って。もう、いいから」

宏美は低い声でそう言うと、ノブを思い切り引く。だが田牧の足が邪魔をして扉はそれ以上動かない。

「もういいって、なんだよ、それ」

田牧が強い力で扉を引いた。宏美もノブを引き返したが、田牧の方が力は断然強い。あっさりと扉は開け放たれ、田牧が中に入ってきた。

「帰って。上がらないで」

宏美はうつむいたまま田牧の胸を両手で押した。このまま押し出したかった。その手を田牧は握るとぐいっと抱き寄せる。

「だめだって！」

宏美は叫んで田牧の腕から逃れた。田牧は驚いたような顔でまじまじと宏美を見つめている。

「お願いだから、帰って。もう来ないで」

「だから、どうして」

田牧の目が僅かに細くなる。

「このまま何もなかったことにしましょう。もういいですよ」

田牧は小さく首をかしげた。鋭い視線を宏美に投げかける。

「理由もわからずそれはないな。上がるよ」

「ダメだって！」

宏美は田牧を押し留めようとしたが、田牧は強引に靴を脱ぐとずかずかと上がりこんできた。

居間に入るといつものソファーに腰をかけた。

「ダメだって言ったでしょ！ 出てって！」

宏美は思わず怒鳴った。田牧は全く気にする様子もなく、のんきに手招きして、自分の隣をポンポンと叩く。ここに座れということらしい。宏美はそれには応じず、キッチンの流しにもたれた。

田牧は呆れたような顔で小さく溜息をついた。しょうがないヤツだとしても言いた気だ。

「昨日の飲み会欠席しただろ。体調不良だって聞いたから、心配になつて来たんだよ。最近顔色も悪かったし」

誰のせいだ、誰の。宏美はそう叫びたくなるのを必死で我慢した。「家の方も落ち着いたし、やっと元の生活に戻れた」

元の生活？ 元の生活って一体なんなの？ 宏美は心の中で呟く。このままでは自分の中の何か壊れそうだった。自分の肩を抱きしめる。

田牧はじつと宏美を見つめていた。

「今まで通りだ」

「だから、もういいのよ」

宏美は田牧の言葉を遮った。

「もういいの。別れましょう。奥さんの怪我、丁度いい機会だったと思うわ」

堰を切ったように言葉が溢れてくる。

「貴方はどうだったか知らないけど、辛かった。本当にこの何ヶ月か、辛かったのよ。貴方に家族がいる事はわかってた。わかって付き合ってた。割り切ってたつもりだった。でもどうしようもないくらい辛かったのよ」

アイシテル？ まさか、そんな事を思っているはずがない。なのに何故ぐるぐると胸の中を駆け巡るのか。

アイシテル。嘘だ。そんな言葉は口が裂けても言いたくなかった。「宏美？」

「私がどれだけ苦しんだって、何も変わらない。私の手元には何も無い。貴方は家族を捨てる気なんてないもの。所詮遊びだと割り切ってたんでしょ」

「……」

アイシテル。そう叫べたら、どんなに楽になれるだろう。しかしそれは出来なかった。そう口にした途端、自分の負けを認めることになる。

宏美の苦しい葛藤をよそに、田牧は苦い表情を浮かべながら呟いた。

「安っぽいドラマみたいな事言うんだな」

「安っぽくて悪かったわね！」

宏美は思わずかっとなって手元にあった布巾を掴んで田牧に向か

って投げつけた。

「どうせその程度にしか思われてないのよ。そんな事わかってる。だからもう別れて！ 帰って！」

宏美は田牧に詰め寄ると腕を掴んで引っ張った。

「落ち着けよ！」

「私が苦しんでいる時に貴方は自分の家庭で幸せごっこしてた。私には手の届かないところで！ 私に見せびらかして！」

ただの火遊びなら、どんなに気が楽だったか。いつの間にか火遊びではなくなっていたのだ。そう、自分だけ。田牧にとっては今も火遊び。男の罪な欲望に自分はいつの間にか焦げ付きそうだった。そして残酷な屋気楼だけが、目の前に揺らめく。そう、近づけば遠ざかる屋気楼の楽園。どれだけ追いかけても、絶対に手は届かない。そんな幻に翻弄される自分はなんと惨めなのだろうか。

ふいに宏美はその場にしゃがみこんだ。涙がこぼれてくる。こんな事を叫びながら取り乱している自分がたまらなくみすばらしい。

「何を言ってるんだろう、私……」

両手で顔を覆う。田牧は困惑した表情を浮かべて宏美を見下ろしている。

「それは僕に離婚しろって意味か？ 離婚して僕と結婚したいということか？」

田牧の言葉は不気味なくらい静かだった。重苦しい沈黙が流れる。宏美は袖で涙を拭くと顔を上げた。田牧と目が合う。

「離婚？」

妙に生々しい現実の匂いのする言葉。宏美は弱々しく頸を横に振った。

「……そんな事、考えてない」

消え入りそうな声だったが、それは嘘ではなかった。

田牧と一緒に過ごす時間には生活臭が感じられないのだ。いや、感じたくないのかもしれない。一部の隙もない田牧の姿が好きなのだ。無防備でだらしなくくつろいでいる田牧を傍で見たいとはこれ

っぽつちも思わない。

そして自分もまた普段着の姿を見られたくない。田牧が自分に求めているものは「女」であり、自分もまた田牧に「男」を求めている。完璧な男女の関係、欲望の結晶……のはずだった。

「ただ、こんな関係続けていても不毛だって。意味ないって。……もう四十なのよ、私。タイムリミットよね、結婚だって出産だってでも貴方が傍にいたら、私、先に進めない」

いくら自分が本気になったとしても、二人の関係は何も産み出さない。将来もない。幻に過ぎない。田牧が自分を抱くのは愛なんかではない。それがわかつているのに、甘く淫らな刹那の瞬間が理性を打ち砕く。麻薬のような田牧との交わりが現実を見失わせる。その事実をこの何ヶ月かで思い知らされたのだ。

田牧は溜息をついた。そして宏美の肩を抱きしめる。

「……だからダメだって」

身をよじる宏美の耳元で田牧が囁く。

「僕は嫌だよ。宏美を離せないな」

「エゴイスト」

「なんとでも言えよ。別れない」

宏美は腕の中で抗うが、田牧の腕の力はますます強くなりほどけそうにない。

「どうせ長い事セックスレスの夫婦だ。アイツだつてとつくに僕から心は離れてる。好き勝手に遊んでる。どっちが先に離婚を言い出すか、お互いに探ってるようなもんだ」

田牧の手が宏美の頬を包み込み、いつものように強引に唇を塞ぐ。宏美は必死で顔を背けた。

「貴方の家の話なんか聞きたくない。いまさらそんな事私に聞かせてどうするの？ 火遊びなんかやめて、奥さんと仲良くしたらいいじゃない。それでお願い」

そう、無かつた事にすればいい。全て元の鞘に収まれば、それでいいではないか。

唐突に田牧が黙りこむ。そして宏美の顎を片手で掴むと、ふんつと鼻を鳴らした。

「何言ってるんだ、……お前だって本当は欲しいいくせに」

田牧が低い声でせせら笑う。

「あんなに感じて、よがって、好きなくせに。何、急に純情ぶって、マトモな事言ってるだよ」

宏美はかっとなり田牧の手を振り払い、思い切り頬を張った。派手な音が鳴り響き、田牧は一瞬たじろいだ。しかし、それは田牧の気持ちに油を注いだようなものだった。

すばやい動きで宏美の手首を捉え、そのまま押し倒す。

「やめて！」

もう一発ひっぱたこうとした反対の手もあっさりと掴まれ、床に押し付けられる。振りほどこうとしたが、痛いくらいの力で抑え込まれ身動きがとれない。

「だいたい結婚する気も、子供を持つ気もあるのか？ 本気でそんな事思ってるのか？ そんな気があるなら所帯持ちと寝るなよ。何をいまさら」

宏美を見下ろす田牧の瞳には今まで見た事のないような凶暴な光が宿っていた。乱暴に片手で宏美の両手をまとめて押さえ込み、一方の手をセーターの下に差し込んできた。

「！」

容赦なく乳房を揉みしだかれ、宏美は唇を噛み締めながら呻く。

田牧はすかさず首筋に顔を埋めると、強く吸い上げた。宏美の反応を確かめるように何度もきつく唇を押し付ける。

蜘蛛の巣にかかった羽虫のようだった。もがけばもがくほどがんにじがらめにされていく。宏美は必死で抵抗していたが、田牧の唇から身体の中に注ぎ込まれる甘い毒に少しずつ身体が麻痺していくのを止められない。拒絶のすすり泣きはやがていつもの熱い吐息へと変わっていく。

宏美の身体から力が抜けていくのを確かめると、田牧は本格的に

体重をかけながら宏美の身体を貪り食い始めた。

屈辱的な体位を強いられ、体中に蹂躪じゆうりゅうの痕跡を残される。田牧の欲望に身体の中を激しく粘っこくかき乱され、宏美は我を失った。唇からほとばしる悲鳴ともよがり声とも取れない泣き声を殺そうと宏美は必死で唇を噛みしめた。屈辱と羞恥と、そして倒錯した快感。頭に血が上り意識が飛びそうだ。そんな宏美の様子が田牧の捕食者としての本能をますます煽り立てるようだった。

うつ伏せにされ背後から貫かれる。田牧は乱暴に宏美の髪を掴むと顔を上げさせた。息を切らしながら耳元で囁く。

「こんな事されて……泣くほど喜んで……もつと欲しいんだろ、言ってみろよ。欲しいって！」

宏美はくぐもつた声をあげながら激しく顔を左右に振った。田牧は宏美の腰を抱え込むと更に動きを強めた。獣の咆哮と生々しくなばつく水音をBGMに、際限なく、容赦なく、抉られ、こすり上げられ、突き上げられる。地獄の炎に焼かれているような、終わりのない灼熱の官能と苦痛。何も考えられない。ただひたすら猥らで穢れた濁流に身も心も翻弄されるしかなかった。

やがて大きなうねりが宏美の子宮から頭の芯にまで駆け上り、宏美は身体をのけぞらせ、震わせながら、全てが終わった……。

宏美は目を開けた。頭が痺れたようにぼうつとしている。居間の絨毯の上で横たわっている事に気が付くまでしばらくかかった。のろろと身体を起こす。申し訳程度に身体にかけられていた毛布がずり落ちた。エアコンが効いているとはいえ、むき出しの肩は寒い。毛布を肩までかけ直し、自分の身体を抱きしめた。

しんとした静寂と微かなエアコンの風の音。さっきまでの出来事が夢の中かと思われるような静けさだ。しかしその静けさとは対照的に嵐の後のような散らかりようの部屋の様相が宏美を現実へと引き戻した。ソファームもテーブルも随分と移動していた。あちらこちらに無理やり剥ぎ取られたセーターや下着が散乱している。

部屋の中に田牧の気配はなかった。宏美が朦朧としている間に帰ったらしい。慰めも、謝りもせず、なんの余韻も残さず、自分の欲望だけをぶちまけて……。

田牧に驚づかみにされた髪はひどく乱れていた。宏美は震える手で髪を梳く。髪が引き連れるたびに、田牧の乱暴な恐ろしい力が甦る。

ベッドではなく、床の上で、ねじ伏せられ、組み伏せられ、力で無理やり犯された。無理やりだったはずなのに、いつの間にか身体が反応していた。拒否していたはずなのに、あれほど忘れようとながっていたのに、自分の中の何かが弾けとんでしまった。そして気がつけば、獣のように交わっていた……。

突然、嫌悪と後悔と羞恥とが津波のように一気に押し寄せ、宏美は吐き気に襲われた。

這うようにして浴室へ向かい、シャワールの栓を思い切り開いた。水が湯に変わるまでの間がもどかしい。

ふと目に留まった洗面所の鏡に映った自分の身体には田牧の唇の痕が花びらを散らしたようにあちこちに残されていた。罪人の刻印だ……。自分達はどうしようもない罪人だ。

思わず目をそむけた時、身体の中から、禍々しい熱を帯びた田牧の残滓が生き物のように出て、内腿をゆっくりと伝っていくのを感じた。宏美の身体を喰らい尽くす、白い、細い、いやらしい蛇。

宏美は反射的にシャワーを掴むとまだ湯になりきらない水を身体に当て、一気にその蛇を洗い流した。そして狂ったように全身を洗う。頭の前から足の先まで、そして身体の中まで、田牧の残した全ての痕跡を洗い流したかった。田牧に屈した自分を水に溶かして流してしまいたかった。

*

年度末になると慌ただしく会社全体が動き始める。業務課も例外

ではなく宏美も毎日のように残業しなければならぬ状況が続いていた。

宏美にとっては忙しい方が良かった。田牧との件の後、落ち込む日が続いていった。家にいると不安になるのだ。特に週末が近づくと家にいるのが怖かった。田牧がまた訪れるのではないか、田牧が来たらまたずるずると関係を持ってしまふのではないか、そんな思いが心の中に煙のように立ち込める。本当にもう手を引きたい。でも会えばまた田牧に屈してしまふ。それをどこかで望んでいる自分がいることもわかっていった。

携帯電話は田牧の番号を着信拒否にしてある。仕事中は極力直接顔を合わせないように都合をつけた。用事がある時は内線電話が、課内の樹里に頼むようにしていた。

八時を過ぎ、ようやく宏美は自分のパソコンの電源を落とした。同じように残業をしていた樹里も帰り支度を始めている。

「主任、帰ります?」

「うん。お疲れさま」

宏美は伸びをしながら樹里に笑みを見せた。樹里が近づいてくる。

「主任、大丈夫ですか?」

「ん?」

樹里が心配そうに宏美を見つめる。

「最近、顔色悪いですよ。痩せたみたいだし。働きすぎですって」

宏美は苦笑いを浮かべる。よく見ている子だ。実際に秋からこっち七キロ近く体重が落ちていた。原因は言わずもがな、だ。

「樹里ちゃん、夕ご飯どうするの? おうちに帰ってから?」

「いいえ、もうこの時間だもん、作るの嫌です」

樹里は友人とルームシェアをしているらしい。その友人とは家事は完全に別に行っているらしく、実質一人暮らしのようなものと樹里は言っていた。

「お友達は作ってくれてないの?」

「ありえませぬね。第一、彼女の料理なんて恐ろしくて」

樹里はケラケラと笑う。

「そう、じゃ、夕ご飯、付き合ってくれる？」

「え、いいんですか？」

二人はまだ数人残っているオフィスを後にした。廊下を歩いていると会議室から出てきた田牧とすれ違う。

「お疲れさま」

田牧が二人に声をかけた。

「失礼します」

宏美は目を合わさずにつっけんどんな調子で頭を下げるとすつと通り過ぎる。

一瞬田牧の絡みつくような粘っこい視線を感じたが、あえて無視した。歩きながら無意識にショルダーバッグのヒモをきつく握り締めていた。

二人は会社の近くの小さなレストランに入った。樹里や他の若い女子社員がよく利用しているらしい。

二人で向かい合って座り、お手拭で手を拭いていると樹里が改まった調子で口を開いた。

「主任、私、気になってるんですけど」

「なに？」

「部長と何かあったんですか？」

宏美の手が一瞬止まる。

「何かって、何？　なんか、変？」

出来るだけ自然に振舞おうとするが、小刻みに指が震える。

「なんか最近部長の事、避けてるみたいに見えるから」

「……そんな事ないわよ」

宏美は無理やり笑顔を作ってみせた。

「部長、本社に戻るみたいですよ」

「え？」

思わず樹里の顔を見つめる。

「そうなの？」

「人事課からちらつとそんな話を小耳に挟んで。まだオープンじゃないですけど」

「……」

この二ヶ月近く、田牧からの連絡の一切を断っていたのでそんな話はこれっぽっちも知らなかった。

「部長が本社に戻ったら寂しい思いする女の子も多いんじゃないの？」

宏美はわざと軽口をたたく。一番寂しい思いをするのは自分だ。

田牧がいなくなる。その事実は宏美の心をゆっくりとかき混ぜ始めた。かき混ぜられた心の中は、ありとあらゆる感情が全て一緒くたになってどろどろの力オスとなっていた。

樹里が会社の中の人間関係の話を無邪気に話し始める。その合間に空ろな相槌を打ちながら、頭の中では田牧と、田牧と過ごした時間が揺らめきながら甦り、そして消えていく。それはまるで塵気楼のようだった。頭の中の血液がゆっくりと下がり、ふうつと意識が途切れてしまいそうになる。

「主任！ 大丈夫ですか？」

樹里が慌ててテーブルの上に置かれていた宏美の手を強く握った。

「顔、真っ青ですよ？」

宏美はふいに我に返った。貧血の後の気分の悪さだろうか。気分が悪い。気持ちの悪い生唾が大量に込み上げてくる。このままでは樹里の前で見苦しいことになりそうだ。全身の脱力と共に、お腹も痛くなってきた。

「……ごめん、樹里ちゃん。トイレ、行ってくる」

ふらふらと立ち上がるが、立ちくらみがしてテーブルの端にしがみつくとつづくまいった。

「主任！」

樹里が慌てて宏美の身体を支える。

「立てますか？ 気分悪い？」

樹里の肩にしがみつくと、立ち上がる。と、同時に身体から何か流れ出した。生理の時の、あの感覚だ。

「……あ」

宏美は思わず足元を見る。スカートから覗いている内股に紅い筋の線がゆっくりと這い下りてくる。その紅い紐は膝の裏を伝い、足元へと辿り着く。この紅い紐は一体、何？ まるで意識が身体から流れ出していくような……。

無意識に下腹部を抱え込むように押さえ、宏美はその場に崩れ落ちた。

オアシス（前書き）

田牧の子を流産し、身も心もボロボロの宏美は自分を追い詰めるように毎日を過ごしていた。そんな中、田牧の異動が発表される。

オアシス

5 .

ベッドに横たわった宏美はぼんやりと白い天井を見上げていた。腕には点滴のチューブが繋がっている。頭の中は真っ白で何も考えられなかった。

先程病室を訪れた若い男の医者が言った言葉が頭をぐるぐると回っている。

「残念ですが、流産です」

マスクで覆われた口元がもごもごと動くのを見ながら宏美の思考はそこで停止した。

あの時の交わりで妊娠したのだ。その後、生理がこなかったが元々不順だったところに、年度末の忙しさで気がつかなかった。気分がすぐれないのも、ストレスだと信じきっていた……。

命とはもつと清らかで純粋な交わりの中で授かり、温かい感情と愛情に包まれて育まれていくものではないのか？ 私と田牧のような、こんな爛れた関係でも命を生み出してしまうなんて、思いもよらなかった。

もし、この命が流れ出ていかなかったら、蜃気楼の中の楽園は私の前に現実の物として現れただろうか。この小さな命が楽園へのパスポートになっただろうか。

いや、仮にこのまま妊娠が成立したとして、私はこの命を産み落とそうと思っただろうか。田牧との間の子供だ。歓迎される存在ではない。田牧が認知する？ ありえない。きつといずれは闇へと葬られる運命の子だったのだ。だからこそ、この子は自ら私の中から出て行ったのだ……。

天井を見つめる宏美の目から涙が流れて落ちる。私は一体何をやってるのだろうか……。莫迦だ。

退院してすぐに宏美は会社に復帰することにした。復帰する前の日の晩に樹里に電話をかけ、礼を言った。樹里には結局何から何まで世話になったのだ。入院の手続きや用意、退院の手伝いまで親身になって手伝ってくれた。診断名についても知っているが、それについてなんの詮索もしなかった。

「会社には風邪をこじらせたって言ってありますから」

「ありがとう。本当に迷惑かけちゃって……」

宏美が礼を言うと樹里はくどくどと説教を始めた。

「まだ出社したらダメですよ。主任、無理しすぎです。もうしばらく休んだらどうですか。お医者さんだって二週間は安静にって言っただじゃないですか。診断書出して、しばらく休むべきですよ！」

「診断書は……出さない。有給がいっぱいあるから、有給で処理するわ」

診断書を出せば流産という事がばれてしまう。妊娠して、流産したという事実を、田牧には知られたくなかった。

「それに、この年度末にそんな悠長な事」

「何を莫迦な事言ってるんですか！ いくら年度末が忙しいからって、身体壊しちゃ元も子もないでしょ！ 確かに主任が不在だと大変ですけど、その辺は部下を信じてくださいよ。大丈夫です、なんとかしますから。たまには人に任せることもしなくちゃダメなんですよ」

樹里は自分よりも年下だが、まるで母親のようだ。宏美は苦笑いした。実家の親にもまだ報告していない。恐らく一生言わないだろう。

「それに……部長に言わなくていいんですか？」

「……」

樹里の言葉に宏美は黙り込んだ。

「相手は部長なんでしょう？ このまま黙って終わらせていいんですか？」

樹里の声が真剣に怒っているのが手に取るようにわかる。

「……知ってたの？」

「わかりますよ、お二人見てたら。部長が誰かと不倫してるんじゃないかって話は前から噂になってたし……。何年同じ課で仕事してると思ってるんです？」

「田牧さんに言ったの？」

「まさか。言うならご自分で言うてください。そりゃ、頼まれれば言いますが、ついでに蹴りもいれますよ」

樹里の不機嫌な声に宏美は思わず小さく笑った。

「私が蹴りいれるならともかく、あなたが田牧さんに蹴りいれてどうするのよ」

「だって腹立つじゃないですか。このまま涼しい顔で、一人で本社に帰るんですよ？ いいんですか？」

宏美は溜息をついた。

「大人だから……お互い。わかってて付き合ってたんだから……」

そう。最初からわかってたことだ。大人だから……。ただの火遊び。何も生まない関係。田牧はこのまま本社に帰る。何も無かったことにして。そう、全て私の望んだまま。それでいい……。

「本当にそんな事、思ってるんですか？」

受話器の向こうの樹理の声が怒りで震えている。

「主任一人が貧乏くじ引いて、それで本当にいいんですか？ 何、大人の女ぶってるんですか。……こんな事言っちゃなんですけど、ものわかりいい女なんて……そんなの、ただの都合のいい女ですよ」
樹里の厳しい言葉が宏美の心に突き刺さる。同じ言葉を田牧の口から聞いた事があった。「大人の女はものわかりが良くて……」。そう、自分は都合のいい女に過ぎないのかと、その時思ったのだ。胸が苦しくなり、うずくまる自分の姿がプレイバックする。

「樹里ちゃん、もう止めて」

宏美は思わず叫んだ。

「そんな事、言われなくても自分が一番わかってる。樹里ちゃんに

まで言われたら、私……」

情けないと思いつながら涙が込み上げてくるのを止められなかった。「すみません、言いすぎました……」

樹里が電話口の向こうで慌てているのがわかる。

「でも、主任、誤解しないで下さい。主任が傷ついているのを観て見ぬふりは出来ないと思って……。主任にはさんざんお世話になってますし、私にとってはお姉さんみたいな存在だし……。お節介だとはわかってるんですけど。とにかく、お願いですから、無理しないで下さい。何でも手伝いますから」

樹里が必死になって言葉をつないでくれる。宏美は受話器を握り締めながら、頷いた。

復帰してから宏美はいつもと同じペースで仕事をこなしていた。

時々樹里がこっそりと体調をうかがってくるが、無理やり笑顔を作って空元気を装った。

時々崩れ落ちそうになるような倦怠感や目眩もするが、そんな事はどうでも良かった。倒れるなら倒れればいい。このまま自分が壊れてしまえばいい。こんな愚かな自分なんぞ、このまま疲弊して磨耗して、粉々になって消えてしまえばいい。そんな投げやりな感情が宏美のアクセルを踏み続けていた。

おかしいもので、空元気で虚勢でもその気になればとりあえず人は生きていけるらしい。家に帰るなりトイレに駆け込んで、胃がひっくりかえるほど吐いたとしても、朝の電車の中で貧血を起こして、途中下車した駅のホームのベンチでうずくまっただけでも、宏美の身体は毎日の生活を送ろうとあがくのだ。

自分の身体が自分の物でないような、心がどこか離れたところで自分を眺めているような、そんな乖離した感覚が苦痛を和らげている。空っぽになった宏美を何かが操っている、そんな気がした。

どうにかこうにか年度末の修羅場を乗り切り、新しい年度が巡っ

てきた。人事異動の辞令が正式に発布され、樹里から聞いた通り、田牧の異動が発表された。

宏美はぼんやりと掲示板に張り出された辞令を眺めた。周りの雑談も、人の足音も耳に入らない。全てがぼやけて現実味を失っていた。時間の流れさえも止まってしまったような気がした。

これで全てが終わるのだ。田牧は自分の前からいなくなる。望んでいた通りに田牧から解放される。ようやく麻薬から逃れることが出来る。なのに何故少しも嬉しくないのだろう。なんの安堵感も、開放感もない。心の底にぽっかりと空虚な穴が開いたような気がする。そこからは寒々しい風が隙間風のように吹き込んでくる。そしてその隙間風は宏美の心の輪郭をさらさらと風化させ、その存在を消してしまいそうだった。

残された時間は長くはない。もう一週間もすれば田牧は本社に帰る。麻痺した頭に嘔きが聞こえる。このままでいいのか。本当にこのままでいいのか？ 宏美の心の穴から何かざわざわと蠢めきながら這い出ようとしていた。

田牧は自分のデスクを片付けるため、オフィスに残っていた。明日の朝には荷物を社内で送ってもらう。明日の自分の仕事は各部署へのあいさつ回りだけだ。三年足らずの間だったが、結構色々物が増えていく。こまごました物を詰め込んだダンボール箱が三つ、四つと増えていき、デスクの上には乗り切らない。

ふうつと大きな息を着くと壁にかかった時計を見た。もう八時近い。

「そろそろ帰るか……」

オフィスには既に人気はなく、広々としたフロアで灯りが着いているのは田牧のデスク周辺だけだった。

明日の段取りをアレコレ考えながら、ハンガーにかけてある上着を羽織った時、背後で人の気配を感じてぎくつとした。振り向くと

パーティーションの陰からゆらりと人が出てきた。

「宏美……。おどろかすなよ」

思わず声を上げる。白い、小さな顔はここしばらくの間で随分と痩せたように見える。

「いよいよ明日で終わりね。ご栄転おめでとうございます」

冷やかな表情を浮かべた宏美はわざとらしく頭を下げた。

「なんだよ、急に」

田牧は開き直ったように宏美に向き直ると僅かに口元をゆがめた。「ずっとシカトしてたのに、今頃どうしたの？ 寂しくなった？」

皮肉っぽい口調に、宏美は後ろのデスクにもたれると頸をかしげた。

「寂しい……。そうね。ずっと寂しかったのかも」

視線を足元に投げかけ、伏せた睫毛が小さく震えて見えた。田牧はゆっくりと宏美に歩み寄る。不意に手を伸ばし、宏美の顎に手をかけると自分の方へと向けた。宏美は抵抗することなく顔を上げ、田牧を上目遣いで見つめた。視線が絡み合う。

「随分長い事へソ曲げてたよな。仲直り、したいって？」

田牧は宏美の身体を抱きしめた。オフィスには誰もいない。そして明日で自分はここから去る。そんなずるい計算が、田牧の欲望を刺激する。

宏美の背中にまわした手をゆっくりと下へと下ろしていく。

「こないだは悪かったよ」

そんな事を言いながら、田牧の口調にはどこにも悪びれた感はない。それどころか、遠慮も戸惑いもなく、宏美の身体をゆっくりと粘っこく愛撫し始める。

宏美は人形のように田牧の腕の中に抱かれたままだ。

田牧は宏美の無反応を無抵抗と取ったらしい。両手で宏美の肩を掴むと、そのままデスクの上に押し倒そうとする。宏美は両の肘をデスクにおいてなんとか上半身を支えた。

「月に一度は会議でこっちに来る。会おうと思えば、いつでも会え

る、だろ？」

田牧は宏美の首筋に顔を埋め、更に体重をかける。膝を使って宏美の両脚を割った。なんだかんだ言っても、コイツは自分から離れる事はない。その証拠にこうやって身体を開こうとしている。単身赴任最後の情事として、このまま、この場で、この女を味わうのも悪くない。そんな残酷な欲望が田牧の中に渦巻いているのが伝わってくる。

「……赤ちゃんが出来たの」

突然宏美が無機質な声で呟いた。

田牧の動きが止まる。赤ちゃん？

「この前よ。身に覚えがないなんて言わないよね？」

田牧は思わず身体を引こうとしたが、一瞬早く、宏美が田牧の背中を両手で抱きしめた。支えを失った宏美の上半身はそのままデスクの上に仰向けに倒れ、田牧が押し倒したような形になった。宏美の腕が田牧の背中に絡みつく。

「やりたいからヤツただけ。なのに子供って出来るのね。そんな事、考えたことなかったんじゃない？」

感情の消え失せた、冷え切った声が耳元で響き、田牧は背筋が寒くなった。

「……離せ」

宏美の身体から手を離し、なんとか身体を起こそうとするが宏美の身体は石のように重く、細い腕が触手のように田牧を絡め取る。

「なんで？ このまま、ここでやりたいんでしょ？ どうぞ。この間みたいに、やってよ。こういうの、好きなんですよ。」

台詞とは不釣合いなぐらいに低い、凍りつくような声。田牧は宏美を引き離そうともがいたが、不自然な姿勢のままもがいているだけで宏美の呪縛から逃れられない。

「ちよつと、待て、とにかく離せ！」

「今まで通りだって言ってたわよね。別れないって、あの時言ってたわよね？」

唄うように眩きながら絡みついてくる女が得体の知れない妖怪に思える。田牧は必死で宏美の身体から逃れ、勢い余って床の上に転げ落ちた。

宏美はゆっくりと身体を起こすと上から田牧を見下ろす。

「なんで逃げるの」

じわじわと身がかがめ、田牧の上に覆いかぶさる。宏美の髪が田牧の顔に触れた。手を伸ばし、田牧のネクタイを緩めるとシルシユルと抜いていく。

「どう？ これで縛ってみる？ ……ずっと縛り付けていてもいいのよ？ そうしたかったんでしょ？」

「宏美、お前、どうかしてるぞ……」

田牧は震える声を振り絞った。薄暗いオフィスの中で、異様な光を宿した瞳に田牧は戦慄した。完全に正気を失っているとしたか思えない。

「赤ちゃんの事、どうする？ 奥さん、今まで通り知らん振りしてくれるかしら？ ねえ、どう思う？」

「……産むなんて言うんじゃないだろう？ 宏美、悪い冗談は止めるよ」

田牧は無理に笑いながらそう振り絞るように言った。宏美は小首をかしげる。

「なんで？ 冗談なんかじゃないわよ。産んじやだめなの？ 本気よ、私」

「莫迦な事、言うなよ！ ありえないだろ、そんな事！」

田牧は思わず怒鳴る。宏美は顔をじわりと田牧に近付けた。唇が触れそうな距離。抜いたネクタイをゆっくりと田牧の頸に巻きつける。このまま絞められるのではないかという恐怖に、田牧の身体は小刻みに震え、冷たい汗が背筋を流れていく。

「なんで？ 子供がいればなによりも強い鎖になって、私を縛り付けてくれるわよ？ 別れないって言うてくれたわよね」

白い細い指がゆっくりとネクタイに結び目を作っていく。

「こんなもので縛らなくても、私、あなたから離れられなくなる……」

宏美の指がネクタイの端を握り締めるのが見えた。じわじわとネクタイの輪が狭まってくるような気がした。

「いい加減にしる！」

田牧は悲鳴にも似た声を上げると、宏美の手を握り、ネクタイを奪い取った。頸からそれを外し床に投げ捨てると、そのまま宏美の細い頸に手をかける。

「やめるやめるやめる！」

無我夢中で喚き続ける。無意識のうちに思い切り宏美の喉を締め上げていた。ぐうつと言う唸り声ではっと我に返り、慌てて宏美の喉を解放する。

宏美はその場に倒れこみ、激しく咳き込んだ。

「宏美！」

慌てて宏美の顔を覗き込む。顔を紅潮させ、髪を乱して咳き込んでいる宏美の背中をうるたえながらさする。

しばらくして宏美は顔を上げ、田牧を見た。宏美の目からは涙が流れていた。

「嘘、よ……。赤ちゃん……。流れ……。ちゃった。お腹は……。空っぽ」

喘ぎながら呟く。田牧は石になったように動きを止めた。何を言っているのか理解できない。そんなマヌケな顔で、だらしなく口を半開きにしてまじまじと宏美を見ている。

長い沈黙が続いた。ふいに宏美が嗤いだした。何がおかしいのか自分でも判らなかったが、狂ったように宏美は嗤い続ける。嗤っているのに、なぜか涙も出てくるのだ。嗤いも涙も止められなかった。涙で流れてしまったマスカラを指で拭い取り、田牧のワイシャツの胸になすりつける。白いシャツについた黒い筋がまた滑稽に見えて、宏美はまた嗤う。

息も絶え絶えになりながら嗤い続けていたが、やがて宏美はよる

るよると立ち上がった。田牧のデスクの上に置いてあった段ボールを思い切り払い落す。茫然としている田牧がぶざまにうつろたえながら落ちてくる段ボールから逃げた。宏美は嗤いながらデスクの上の段ボールを全て薙ぎ払い、何も無くなったデスクに両手をつけて肩で息をしながら、ようやく嗤うのをやめた。そしておもむろに、冷やかな瞳で田牧を見下ろした。慇懃無礼に頭を下げた。

「さようなら、お世話になりました。田牧部長」

そしてまた壊れたように嗤いながら、ふらふらと歩き出す。時々パーティーションにぶつかりながら、宏美の姿はオフィスの闇の中に消えていった。

散らばった段ボールの間で置き去りにされた田牧の耳にはいつまでも宏美の哄笑が響いていた。

*

梅雨が明ける頃、宏美は久しぶりにシャンティに現れた。週末の、少し早いランチタイム。店の中の客の姿はまばらだったが、相変わらず食欲をそそるいい香りと、厨房からの異国語が微かに漂っている。

「久しぶりですね、中川さん」

オーナーである原田はいつもの人懐こい笑顔で宏美を迎え入れた。「おや、久しくお見かけしないとと思ったら、随分とイメチェンですね」

宏美は照れ笑いしながら短く切った髪を一つまみ引つ張った。

「ちょっと短くしすぎちゃって、中学生みたいになっちゃったかも」「そんな事ないですよ。ますます若くて可愛らしい。お似合いです」宏美はいつものカウンター席についた。

「女性が髪を切るのは失恋した時だって言いますけど?」

原田は髭面に悪戯っ子のような笑みを浮かべながらお冷の入ったグラスを宏美の前に置いた。宏美はそれには答えず、苦笑いを浮か

べた。

「刺激物食べるの久しぶりなんですよ。ちょっと胃を悪くしちゃって」
宏美がメニューを開きながら言う。と原田はうーん……と唸ってメニューを指差した。

「じゃあ、この辺はいかがですか。野菜ベースで、辛さはお子様仕様にしましようか？」

冗談とも本気とも取れるような原田の言葉に宏美は思わず笑い出した。

「じゃ、かぼちゃとチキン。お子様仕様でお願いします」
「はい。かしこまりました」

原田が髭面に人懐っこい笑顔を浮かべながら厨房に入っていく。宏美はその姿を見送りながら、久しぶりの空気をゆっくりと吸い込んだ。相変わらず刺激的な香辛料の匂い。ここしばらくは身体が香辛料を受け付けつけず、香辛料は避けてきた。最近になってようやく普通に食べられるようになったのだ。そうしたら急にシャンテイの空気が懐かしくなった。

宏美はおしぼりで手を拭きながら、ぼんやりと思いをめぐらせた。あの時何故あんな醜態をさらしたのか、自分でもわからない。田牧に復讐したかったのか。自分の想いをぶつけたかっただけなのか。恨み言をいいたかったのか。あの場で抱かれたかただけなのか。どれもそうだとも言えるし、どれも違うような気がする。ただ言えるのは、確かにあの時の自分は壊れていた。制御不能になった自分の感情に翻弄されるがまま、身体が動いた。

あの後、どうやって家にたどり着いたのか覚えていない。とにかく二日間寝込んでしまった。何をやる気にもなれず、ベッドの上でさなぎのように丸まってひたすらぼんやりと過ごした。蝶になり損ねて、さなぎのまま、干からびて死んでしまいかもしれない。それも悪くない。どうせ私は蝶にはなれないのだから……。そんな事をぼんやりと思っていた。

それが二日目の昼過ぎ、お腹が鳴った。マヌケな音で、キュルキ

ユルと。その音と、空腹感が妙に可笑しくて宏美は一人でくすくすと笑い出した。

こんな落ち込んで、死にたいくらい惨めなのに、なんでお腹が減るのか。あの人無しでは生きていけないと思いつめているのに、なんでお腹が鳴るのか。なんと現実とはロマンを解さないことが。

そう思うと急に自分の悩みが莫迦莫迦しく思えてきた。そして自分の身体に愛おしさが湧いてきたのだ。宏美は笑いながら、いや泣きながら、這うようにベッドを抜け冷蔵庫の前に立っていた。

結果的にはこれで良かったのだと思う。田牧は恐れをなしたのか、あれつきりパツタリ音沙汰無しだ。月に一度は会議で出張してくると言っていたはずだが、会議にはテレビ電話での参加が続いているそう。なんでも経費削減のためと田牧自身が提案したらしい。

田牧の事を思い出さないと言えば嘘になる。ふいに田牧の声やぬくもりがフラッシュのように脳裏をよぎり、息苦しいような想いが甦りそうになることもある。しかし以前のような鋭い苦痛と言うよりは次第に鈍いぼやけた痛みへと薄らいできているのも確かだった。時間薬と言うやつだろうか。体調も少しずつ回復してきているように、通勤途中で倒れたり、激しく嘔吐することも減ってきた。体重も少しずつではあるが、戻ってきているようだ。

しばらくしてから髪を切った。伸ばしていた髪は田牧の記憶を溜め込んでいるような気がした。田牧が触れた部分の全てをすっぱりと自分の身体から消し去りたかった。そうすれば、これから伸びてくる髪は新しい記憶だけを蓄積していく。

「お久しぶりです」

ふいに声をかけられ、我に返る。目の前に、サラダボールを手にした慎の姿があった。サラダを宏美の前に置くと照れくさそうに、「髪、似合ってますよ」

と、言った。宏美が微笑みを返すと、頬に微かな照れ笑いを浮かべ厨房へと戻っていく。

穏やかな気分だった。宏美にとってここはまさしくシャンティそ

のものだ。ゆつくりと流れる時間の中で、心がほどけていくのを感じながら宏美は目を閉じた。

異国を感じさせる香りと空気。でもここに流れている空気は幻のものではなく、確かにそこに自分が存在しているという質量を感じる。それは空気に満ちている香りに、そこはかとない深みを感じるからだろうか。そう、幻には深みも、質量もない。

出てきたカレーを口に運んでいると原田が声をかけてくる。

「どうですか？ 本当にお子様仕様だけど」

「大丈夫。辛くないけど、美味しい」

宏美が答えると原田は満足そうに頷いた。

「辛さがない分、旨味が引き立つでしょ？」

「辛いだけじゃ旨くない、旨味と深みがあるから旨いんだって。色んな味が馴染んでこそ旨いんだって、慎さんが言ってたっけ」

そう、いつだったか、慎がそう言った。確かに辛いけど、辛いだけじゃ旨くない。辛い中に色んな味が入って、色んな食材が入って、それが時間をかけてこなれて、馴染んで、それでようやく旨くなる。「そう、その通り。まあ、なんですな、人生と同じですよ。酸いも甘いもかみ分けて、色んな経験をして、人としての深みが出る。カレーは人生だ！ おお、いいキャッチフレーズが出来た」

原田は豪快に笑い出した。宏美は思わずむせかけて、慌てて水を飲む。

原田は笑いながら宏美のコップに水を注ぎ足す。宏美は涙目になりながら原田を軽く睨んだ。

「もう、笑わさないでくださいよ」

「失礼失礼。お詫びにチャイ、サービスしますよ」

原田は笑いながら奥へと引っ込んでいく。

「人生と同じ……か」

宏美はひとりごちた。

そう、かもしれない。今までの時間はこれからの私への材料の一つ……。そう自然に思えたら、少しは気楽に生きていけるだろうか。

私のような気弱な旅人でも、砂漠の幻に惑わされず、一步一步砂を踏みしめて前へ歩いていけるだろうか。

宏美はカウントーの中の原田と慎をぼんやりと眺めた。あの二人もまた、自分とは全く違った、でもそれぞれ迷い漂いながら道を歩き続けてきた旅人なのだろう。

違う国から流れてきた人間が旅の途中のオアシスで、つかの間の休息を取っている。人の営みを感じさせる空気の中で、語らい、杯を酌み交わす。互いの旅の労苦をねぎらい、疲れを癒し合い、また明日から歩き始めるための活力を与え合う。明日からまた一人で続ける旅が始まる。蜃気楼に惑わされ、迷わされる事もあるかもしれない。でも今は人の温もりを感じたい。穏やかな質量のある平和を味わいたい……。

宏美は食べ終わった皿を引き上げる慎を見上げた。まともに目が合い、慎が照れくさそうな微笑を頬に浮かべる。

「チャイ、お持ちします」

「ありがとうございます」

宏美の頬にも柔らかな微笑が浮かんだ。

穏やかな時間がゆつたりと流れていく……。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1988t/>

砂の上の楽園

2011年5月21日15時10分発行